芭蕉翁附合集評註　上

芭蕉翁

附合集評註

全部二冊

大阪書林　文榮堂梓

牧野文庫

俳諧のつけ句をゝのゞむと思ふ
事のゝ芭蕉翁のつけ句をよむ
度し芭蕉翁のつけ句なよむふ
古の義士が所ゝ為る附合
集よりよりおいあらゞ義士が
いさを　大なるなゞ石
ハゝゝよゝつけ句を古新事の風

[illegible]の附合集をろばふ
[illegible]ひふ古の評注成か
[illegible]に翁を[illegible]ふ
べし加賀俗諧より[illegible]古[illegible]は
[illegible]をひらさ[illegible]べしわが解
成まゝ[illegible]ゆかかりとうの[illegible]
[illegible]を同じ[illegible]る方面[illegible]

芭蕉翁附合集評注上巻

狐の話

二十五条曰狐八発句の余情氣色の
面白くなるゆゑに其句の多くは
持てる狐のゆゑなるべからず
河債尋常往不至
人生七十古来稀
詩酒さもむどまをむさぼる河債ハ
発句ハ[illegible]馬より駕（ノスル）鰹（コイ）
発句詩高人といひ河債といひ詩人酒

後の句のさゞなをのゞくるたゝけくゝみを
微と音まく用ひるまの所る解て漢
句のきゞくたつくりて五句の余情を
句らハしたりけれどこれハみなし栗の
俗諧とて又一神なり翁いまゞ正風
のきゝ面目をあらハざる時のさいふるハ
バ常体とまゞくゝ
霜月や鶴(カウ)の一つゞくゝあらびたて
冬の数日乃句なりけりを
此俳ハきとふ人のかゞとまる名言なき

美色なりあるのりき二句の間ふるゞ
めし升ゝ升ゝあるのを位解ふこの従く
きれを解きるる時き却く第二第ふ前
体ゝいひるるよきを注ゝいゞ太れ
ものゝ如ゝいふハいりくゝいひゞくまて解れ
いひれらるもものよならゞにを出をゞか
きらゞたゞゞふものるり翁もこのを
のを乃俗諧ふいくゝはゞめて正風
の きゝ的をたゝれるるよやまきよは
俳句りさゝれゞいまゞ正風のいとは

なるハバ巻中まく古説の俗説ハ
ふるるゆ ゆりく 猶 意よ法をだ甚
ゆらきものゝちてこの紙鶴のつくく
ならびねくとゆづりめた 洒落(シャラク) なるふ
額字(ガジ)ふても留まゆ ゆりなりやこと
ひ伝しなるゝ紙を紙の巻物といい
ふるもく紙中三ふ方ハ巻の三物
ゆるゆりが師 家更年さけるゆ有
ゆ発白ハ天ゆてかくちなれもの
なゆ紙ハ地ゆてのなるゆをつり

ちぐり方三ハ人ふゝく新くことをつゝ
どる紙ハのなるゆをつちぐりて新ゝ
げるゆをむねとなるものなるハバなゝり
と新らげる額字をもて留るゆを本
式とて本式ハなるハちなゝ物るり新く
まぐさもの、新くハ墨式なるハバ紙
のめくなりりアゆ或ハなりるなぐの
もゝも新くかなもて留るハその物く
又ハ雲霧風吹のなぐひ額字も假
名とも字てらぐるハ行物なり方三ハ

紙とハそ〳〵かりゆ〳〵敷くるをつうちとる
あふ敷くがなかゝりゆゑもてふまて、
うむなどをきら用ゆるすハしかるも
とも敷くがあたりさるに者三のさい紙
なりの假名ハ行紙敷字なるゝ
ハるる紙なりけさいり草天地人の
ことわりをきらざるバ紙者三よ嘲し
ちれど拾弐とふものハかゝるだくか
ハるだらざるものをかくるバねづり
かゝるよりかくはらざるバハみぐりと

世ふ宗道などいひく仏階を高ふ者
何ふつけ國ふつけ侍ふ秘侍とふすす
をつくりく人を拵びく侍ふるすハ
人成はりて價をむさぼらむとての
さわざなるきまことハ仏階ふ侍ふ秘侍
とゝるすハなるものことるハ何づらぬ
すなごとく侍るバけさいり草のすを
一たるの秘侍のやゝよいふ者何きびを
こがまちふ
檀笠雪を人下のやどりル

稽一つゝね ロとてゝゆく

発句旅笠ふる雪をいのちとまる風牡

の旅人ふゝもち原ゝ 稽よ里てゝゆく

さとやゝ乃けゝきをつけたるゝりゝ

行脚の紙衣なり

時ハ秋衣建をゝめゝ 旅のつと

屠をゝもねふ 月ゝ 風の月

発句ハ道ゝおの句なり 時ハ時として秋

の面りゝよ れもゝろき時 ふハ大和路

れゆゝきゝ面まき〳〵衣建をゝけての

旅ふゝバきハめゝく面ゝるなゝめの

つゝも面るゝらむ左ふてゝくゝらやゝすく

ゝろ侍ゝとゝゝふゝゝろをゝけゝく内ゝ

つゝ多生涯旅より旅ふ内ゝら〳〵旅了

ゝも森ゝゝる風や流水のするべき

多を面りゝゝ面いゝつの紙

左ゝ了を旅よよのむゝり詩ゝ

ふれゝ

江戸橋ゝろかよハむいゝ走ゝ

蘭潭の西相 稽平か一りゝる月

公和ハか一つ〳〵にてをされあることゝよるゝ
しほゞゝの人をきバ時ゐ〳〵の為〳〵ふ
にてをバ思ひ出ぬふらむ〳〵いへるこゝろ
を時ゐふ掃〳〵去をわこる他之紙も
ろの所いさつをこけ〳〵いうも薩摩の
ものふかつゆうこゝるとなりこれも古例
なゝをバちゞゝよハ解しがゝ
えろうねふ 恰をめを家取の達
一 羽わろゝ〳〵ふるひをむれ
きこえゝるまゝてくわゝく解まるふ

及びね
時ゐ〳〵ふ溢かり歪むるの尾
火 猪の はふ 俗をつゞ人
発句更ハ尾をまて、出りぬふも
門の溢をバりをふかし歪ぬ時ゐ俳
度〳〵ふハ更が留まにゆゝて猪負
をたの まむ 俗人成らやゝこる
ふ沉されびよりハ出ゆゝも負き
火 猪に はふ をたゝて時ゐをたの
みぬ〳〵いふ〳〵ろなり度も為

名月庵におもむき昇(ノボリ)下したるこゝ俤を
つぐとハ滑稽(コッケイ)のことバ

芭蕉翁ゆかりの白ふき雑煮(ワラヅミ)

月と紅葉白ハ公卿の花酒のとも
葉白ハ公卿の花を主(ぬし)とし鹽ふ
ゐをきく故ゆゑ
ゆゑの白ふき雑煮かへりてゆゝしき
古風の一鉢なれバ俗にいふもきとり
がゝ紙の月と葉ハ何のそもなれ
たゞ風流なたつきゝ酒のとも

てゆゝしきものなりとけゝりけてかの
芭蕉翁ゆかりし白をたゞ花ふてて
繻子ゐをきくゝ故ゆゑゝゝ白るを
白のゝ一ふ芭蕉かゝるを不白
のゝゝバよゝめたゞへゝ芭蕉翁ふ
てゝゝゆやまゝ人たるなもて
いふ説あるとちきゝてハやまらなれ
ど世ゝくゝゆゝるを見ゝ者隆(シモ)すなる
ゆゝさらに
宿まゐらをむ西山なるバ秋の書

芭蕉とさくふ風の彼岸

桑白はいさろうてこ坊西行まさバ
ちこ宿まねらをもて向うけるよいや西
行のめきそるさ孤りさまてハ家
芭蕉とやくふ風彼水安きたう
なげ彼る者まてこうはへとさくさ
る孤なり芭蕉ふ風の彼岸てい
へるひぐきゆくふやたし桑白も公羽
の岸ま西行をこらやあるるをゆ
ての化なり

花の咲多なぐら草の公羽ふ
秋平しはる　篠のくづをれ

桑白ハふうさんをふこうこる化く公羽の
材料傍係なる孤見く何ハ水ハ人を
〳〵世ふ用ひしめバふ人のからふ立
て園の函も何づらしむ屋き人
おなるを芭ふ彼の中ふかれくを
水形孤ふ花のふハちをしからぢや
されどろの人ふとりくハそるく何りが
たさちんふこそたぐひなく蕉屋

しるきてろをかくやうにかくゆてゐ
の翁ふ花の咲てゐるふを秋すてるあつ
うひ赤を紙ハりゞ多城人のをゝみる
にかとろきてこゝ小くるゝ古何
紙ふ赤ゐる〳〵 懐のみる氣きなきく
づをゝる赤ゐ多ゐくこゝいへと辞遠
謙遜のことバなゆ他者の白をつくる
十七字十四字の間ふかざりなゐて
ろなりゝ口上をのべるがめ〳〵悔ふな
ふうくきろをとゞ矢よ

師の樹むすの拾ハむ木の葉ふ
きて紀ふ云おの 紅葉 四十一
紅葉白紙ともふ古祖なふバきえがと
解しゐたりゝも毎盆のるく
霜の宿乃旅森ふ紅屋を見を
古人かやゝ乃 秋の木ゝ
紅葉白はをきさせおの者ふ見をやもの
もなゝ〳〵時ふならぬ紅屋を見をまね
らをむいうのあぢゝつぶせゝ形ぐ
さむとゐいさろゝたるくまゝをふ紅屋

をとゝをとゝるふハ何ちねど芋とをのゝ
ものもなのしそいふことをてうくいひのべ
たるゝ紙ハきぐゝよその何をうけてさる
のをとひろゝ小たゞひなれたもし
ろきるふことて何きと古人もかゝるな
つしきなふゝ本ぐらをきし
るもこそさつゝたゝ小とたゝるよ何
ぐしかやゝのるゆゆしといふことハなけ
れど何るゝだきあゆゝ海をのべるもの
なをとむゝしまのかゝりなどふこゝろかゝる

るハ何ゆ小れ小なぐ原氏物語などふ松ゆ
あるきろるゝ
月ゝよ砂まぐ人五三ね
竹立まゝくたやさて庭の卯の雪
発句のつゝゆつゝ小ゝきゝえかゝ
ゝきぐ陸てとゝバ基ゝよ翁の東砂ふ
ゆきゆゝ道をまぐ川ゝ五三百赤者て
とぐきりゆふゝたをゝいつゝこゝろふ
らむゝ紙ハたやその赤ふ入ゝる去ぐて
庭をゝ小バ垣松の卯乃花ハ雪ゝと

ほのぼのまがきのうづれもろく住なすしたれば
旅のうたをもなぐさむるなりとぞ
咲てうるうるとうるとあの花乃雪といはれ
どあのうるいふるいまぐすまで俳諧
まてかくつうのれかまれ古
祖の体臭まくくようらぬことばるり志べ
く翁の句なれバとて手安くぬなりて
おぐえてるハたるうるなり古祖ようら
ぬ句もれかくこころ
めづらしや芭蕉の中乃公羽中

潔ジの藤くまたるあく梅
発句芭蕉翁の中乃公羽をつけて
風情ほくなく向上なるふあく梅就濤士
の影ふまたるくあるの拙ふをほいを
たる紙なを
芭蕉翁それかどぬ能もほころ
旅森の翁を みまる 月ばびす
発句芭蕉翁ふ翁ふなぐふくこば
芭蕉翁ふたれよちまであるるもれば
まぐ廣くいひる句なり芭蕉翁の

中をふるくちまぐくの旅ふつゝれゆふらむ
ぶろ孔ほど袖もほころびぬ旅ふやくきこ
ぬふりきも見えぬぢちまちふころこいひ
なくちめたるあくろく狐ハそれをうけく
いやく古松もぐぐらだ旅森の雪ハたき
ふやつれてぼろよハ脇をきらきてねどのすす
ぼりよおだきよとこくくたるく
猪鹿や伊吉古の雪ふ影きりむ
ゆ　きくくめく　わづぼ　乃旅
桑白ハきくきおくらの旅ハ猪鹿も伊

うに吉の雪ふ影きりむきくめく紀義
ぬハむハぬくハきものくら又ハをくきゆ
くもをくらむと俗人の旅をつくりくる
おくろをうけくいくもおくをものめくゆ
をふゝて来くめく、きくめくとおくくた
る狐家めきてびく桑白狐ハ人とゆ合
きるぶめく或ハゆゆくくへ或ハ人ゆくとぶゆ
袖ど或ハ人の袖をかつていやく ちよハ
ぬらねといふ狐牛ゆ鮒ハ鮒の後ぬハ
ど桑白ハもと澄おまて伊くをいひ

出むもはるらぬ水ぞ 紙ハそれよりあるぞるお
ちるバ人のことばふかぎりなきさがめくその
時くのよろしきよちてぶちきバ五節八
節ハ九節十節ありてもそこだらぞ
あつどくかるきなどハ節ふの人よりあり
ふまくけて去あきものなきバ所ふがち
にかるべらんだ
いろくの名もむつくや春の竹
くくれくくの節のいるなそちあめる
ゆの茅節の紙なり舞白紙とも所

のまくは春ろと 解をまくだくくくのきら
けくなく二十五条ふ時ろ所あり
ハ寸ふわが宿せまくく紙水仙花
えどえくかをる 風の 草
舞白ハ公田ふまらぬく赤岩を里下
くたる他ふ的らくく紙ハそれ紙ふい
さつくく古宿へまわくくそれバたく
えくかやくの風も草ろ源きふさと
そとほめくるなり風のたきものこつ
くわくくるハ他階なり

あらふ林檎よあたゝのゝ化書

田植ゝまに　旅乃　鈴部

桑の白花を田あふとぐめるちゝのと

ゝろく紅ハたゞその切ふをつけり

ゆゞねも走づゝよゆバからびずや

酒ちひなるふ　過ごろの　月

はゞ酒もたゞよハほらゞ厚ぶねのかち

びたるをきゝつけたる　杜ゲ　岩に秋

夜蘭なるまで　酒ちひゝる　形ちむ　紙

のゝけゝかくたるふゝにまゞ

ちゝるゞ風ゝてみをバやみ波の田植唄

公之　ほらたゝ免むふ　彼の　ちゝぶれ

桑の白ハ旅人よ　桑田ゝ　みゝ波の田植唄

をきりをむとゝ紅ハ　茅をこゆるふハ衣

紙成ほらたむゝいふ　ゝ　紙ふゝみく

わゞぬき　樟弘　形の　ほらゝむ　だき衣

紙もたゝれバふ　彼の　茅をるるハせあ

てゝ公之ゝ　ほらたゝ免　起ていふゝろ

をたゝゞれよ公之ゝ　かけゝり　紙を世

ゝ對　俳といふ　みゝ波といふふ　彼ゝ對

田植よりぞ水かく野べのうぐひす
見をぼやなかなかをちぎる彩の畑
うの葉をかさふをらむゆめぐは
これも恨ふ附ふくたのみはゆめぐば桜の
やちぐみ所ふぐばてらあふこのしてて
いつる田家の所ゆめ海見るぐめし
時ふふやい花まで流る 桂笠
宿ふた 鶯をとむれわらず
発句ふふやふきこゆ花の沢ふ桂笠
を見ふちまのをいてこびちぐれた

所ひたらむぐ今まで流ゆく花ふ見て
末ゆふとつふふろたらばちぐみ時ゆて
やふれど又ハちぐ水ぐやともきこゆえ
ふくハ度くゆふ所ゆふる桂笠るふば
植ぐてもふるぐきふ花の沢ふでもな
ゆ流りふふ新しげたるハちぐ水もち
のふをひたまハぐゆしやふいふふふ
らむぐたぐぐ水てやのかく杉ぐやたる
ぐさ沢ハ赤ゆ所ふ桂ふたとへくかくゆみき
流のふるべふき者成とめふ君ハわら

草のめきゝ人なりゝ此喩しゝ白いさゝ
たるなり
奥底もなくてゝ冬木の梢ふ
小春ふ首のうぐゝ蓑虫
あれも白いさつの登白ゝ黒と赤ハ奥
底もなゝ冬木の梢乃めゝさうぐゝ
まゝも見えもゝゝにいてんもといてるん
をゝけて俗のいつが身を藻漁し蓑虫
のやゝなる世ゝ方も黒ゞ白ゝ小みの小春
世ゝゝまりふハ首を動さといふ紙ゝ

わきもちびよ梅よりも奥の茨椿
茶の湯ふ移る　雪のひよ鳥
発句ハ椿ふなるゝ山本といいるゝゝゝ
ゝゝ梅の奥なる茨椿なるゝ椿
此風流ふ白やゝゝゝゝゝゝもちびよゝの
白いさつなり紙ハちびよといつる白より
茶の湯とつけれのきゞ身をひよるゝ
なりゝる
つが椿紙剃　枇杷の実茶ふ
見ふ詠く山　茨乃花

古きも切ふ附るくちるえだ哉
梅ゑみえくに日永し椿といくら

東の宮乃 宮 森よつく

発句はみのの山のやまるふくハむ
そいくらはゆくゝ花や咲べきといへる吉水
院さその侍 鬱のことバをかりて梅の
花もちりぬをし椿ハまゞ咲ぬ山ちゞれ
日をいくよくらはむくゝつくろ之紅ハその
はるのやくゝたえかふはゆくゝくゝ
かくし古乃 紅の紅ちり

はくゝと複の花は紅ふちる
へこくり茶を椿 椿のひとつ赤
まくゝふさ紅ちなどハ発句をたきけるま
ぐらさくゝ敷さくよはらぬ古ぐゝ紅の薬
ゞかくさ句のめくなるだしてくゝ複
の花乃紅ふちるハ椿のひとつ赤の茶
椿ちらでかふいづくゝやひくゝわくゝふ字
つくゝふくくえちくゝちくらはり嘆ぬ
ろにはまりはやあを
椿ちくよ芝まくふさ者の友雀

扶をこゝろみるふるねの片枝
これも発句の所のこゝろをつけるまでよく
白ゝこゝハ略らゝなり発句も紙もの白ゝ
精怜(トムボウ)の発をかゝえる西日ふ
沒落うゝる 茅ゝの種乃うゝ
発句精怜の発をかゝえるふハさハめて
浦をこの序例所と見ゝ茅ゝの種をいひ
西日といふふ沒落うゝるゆゑ所のりき
をつゝしなふ秋茅ゝの日精面ゝ入
をゆとやいハむふうゝ心をつくべき紙ゝ

文鳥の羽もかいつくろひぬ卵ぐれ
ひとゝ吹風の木乃葉をつゞまる
これ茅ゝ秋の紙なり二句精葉の中
ゝも名育を俗諧なれバ白ゝハ人乃
よくゝる不なりゝ茅ゝ葉ハ俗諧
の法(ホッケ)毒ゝ茅ゝたゞこの一ふふとゞ成るま
ことふ正風の主面目といふべし
市中ハものゝみふひや夏の月
暑しゝと門ゝゝの主年
か一主ゝゝを茅ゝの発句の俗諧ふいつゝわてハま

かく正月の的くもれば今年まいつまをこ
なるきこと舊の月八源しとこうなるべき故
市中のものゝうひとちバ暑うらめか
ることつまをたゞ〳〵ず苔白をよく見さゞ
炎ゝゝものぬゝ悔雪淀引きたゞうだ
涼しゝといふハ山水の氣なれ
庶汁桶の京やゝ以ていうゞき
使うさゝりゝ吉森さる秋
発白蕭〻瑟〻の趣を見ゝ氣寂〻
莫〻の貌をつけゝり庶汁桶の京や

蓋やめバさゝりゝさものゝ出て去つゝ行ハ使
うさゝりゝ吉森さるをれものゝやゞり
なるゞし
芽出しより二葉ふ成る柿の実
畠田の苗ふかゝる柿の花
翁去来が蓋柿今ふ洛毎の時の依
俗ゝうり発句八蓋柿舍を領さゝる
氣八ゝで艾切ゝうり
去来の蓋も一のをや生大根
ゝ〻ゝし公能るふ宮の燥

発句をまふ生大松のうりはのハとをう
ち化ありいうるも大松も生葉も生くら
むかる家ハかるらぎふ宮ちとめてふぐ
ら紅ふ煤の花うめくる山辺さのうり
の古家と見てくる紅之

春風や蓑のゆゆく　水の音

陽あいさむ　つ花乃　ゑぐち

春之之二句の間ふあふくり

茅　往　干　さ　茅　延　の　摺　や　ゆ　ふ　涼

笑　愚　ゆ　ゆ　紫　陽　サ　ギ　花　の　え　な

あてろこふ二句の趣を蓑をバ都を三里陽
なる生葉のさてふふ　ふれ宮なるゲ大ハ
ちひさき川ちぐれ　ちこ　の　敷　花　ハ　た
ア　た　ハ　山　な　る　べ　し　宗　の　庭　ふ　茅　を　蓑　て
茅　往　干　な　る　ふ　の　茅　延　ち　ち　ゆ　く　ふ　ね
まゆて　宮　ゆ　人　の　家　内　の　涼　こ　ゆ　る　さ　な
やがて　太　の　宮　を　ま　り　宮　の　ち　ら　く　を　内
の子ども乃見つけ　く　延　ゆ　こ　茅　陽　蓑
ろれ蓑ゲけふ咲る　ち　ら　し
蠅　ちらふ　ち　や　秋　秋　の　日　数　子

葛もらら吹　帷子乃紙

時分のつけたり

新蕎麦はつざとまて矢ぬ首(カド)巻(デ)る

まゝ子は原の宮たるり

俗の茶粉の根ゝくわるの粉をゝ

いひとめし白たり

帷子八日ゝふきさまゝ賂(モズ)の茸

紙(モミ)　一升を稲のこゝぞ但ス

かゝびらの茸はじくなる風八賂の茸

しきりふて外ハよりゝで涼しるべし

根もろの時分を面をゝく稲りり時をつ

けゝりりて稲のこゝぞ但ス紙一升を

ゝく生不の根粉をのべたり　茸山の茸

れ公羽のはらわゝ八出白たゝふこゝろ

むべきり

面(ツル)佳乃孔ゝ来八海ゆく　栗ゝ孔

乃かゝらを面ゝる栗の種

秋晩のやゝまて面るもゝとりゝがゝ種ゝ

八面をゝく海ゝ面ゝゆく時栗の種ゝ

中よりぬつゝ公蕗のかゝらを面ゝ

らむハめぢまきこちやをむまべて俗合ハ
二句一首の奇と見るべしといへれば注解
もかく一首のしらべちとをるこ
踏る枝ふ拾芙て寄る秋を多
餌番ばむ寄ぐらふ足まる侘寂
時ふと坂ふとの紅葉
秋の風れ先くふ白屋
萩ふ森やゝゝ萩に森やゝゝ
俗の茅紙ふて甚酒落の紅葉り発
句ハれ先くも秋晩の海邊ふく人里

恵く家も見えぬ山屋だくゆゆく
さびしけつゝし紅ゆさまるを風
猪のひゝり鹿と見くかくハつけるる
ゆゆ豆の花咲ふ月り寄の郷
豆の水鶏乃はる澤川
一坂ふるゞめし正風のまたゝ中なるべ
猿笠ふまれるゝ寄れ乃松ふ八
日ハ宝ゝ月れど志づゝなる宝
発句ハ猿猿笠ふのる時の白なれば
きの猿笠ふ松の風ハも秋ゝ寄の松寄

きさらぎ　しとつてろたちむり紙もう
のこころをひつらひたる紙ひり

第三の紙

詩ひきむぐ年をむたぐる酒債ル
冬瓜日くれく　馬ふ加鷲　鯉
千(ホコ)　絶き夷(エビス)ふ　第をゆるさらむ
紙の紙もいつるめくこの紙ハいやぐ西風ふ
入らぎわし　時なりバのちふ正風のさ面目
をたられくる時の俳諧ハ伊ひぐくれ
城古個ともみなり　栗弾ともいふ白ゑ発
白ゑり才三まぐく　漢(カン)のさぐくよつゆた
るなわもべて古個ハ漢俗詩俗などを

多くつらふるをめづらしきるふまたりて
ると見えたりけり水どけ発句ハ廿八用ゲ世の
詩に所そぶ人を所ぎけりたるみて紙衾
三まろのこころ所ゆといつりいらぐたらむ
油雪乃こゝもも 褄 ゑゝく 所る
雨相ふまゝさゝ紙紙都のめし
雪ゑ業まで寿る蝶の羽をふゝく
家くの冬の日ハ徒解よまづらくゆづる
水仙ハ見る君をまに北たりけり
宮の面目平ひらく業且

赤猫ふのら猫通る はりびく
発句ハ水仙ハ冬のもれなきぐも冬のいそ
ぎよ見る君もなくて春ふなりてこうな
ゲ炎たきといふこゝ天ノ紙ハ発句ふ業且の
ことバ也なりしぐ早まと見ゝく業且を
つけさるたたらぬ半三ハ冬まこゝ来の
るふこりなゝく猫の意をつけり半三
の猪ーやゝみふかゝのあー
梅たえゝく日半ー 梅いまゝく
来の宮乃屯 業ふつゝく

巣の中ふ蕨の顔乃孟びねく

発句紙ハ先人ふ解したる通りく第三ハやハ

り紙の切ふよてつけまうも発句のふふ切

らぬやうよつくめたるものく第三ふかざらぬ

まぢく附句ふ三句のわくめを第一とさて

金山原やけらに旅とハ思りかぜ

雪をもくなるさて枝さぐらの松

海士の子ぐ鯨(クジラ)城告る見吹く

発句ハ此身旅ふ居なぐら金原のはた

たらなるに名をもたれ旅を忘るだゆ

なりとく紙ハ発句の切ふ常のふふハ俗ら

ぜ杉もーろく住なりく俗るぐもたぐ

人ならぜ雪中の寒く枝も傷ろうち紙

枝さぐら庭の松ふ雪のかるをなぐむ

るさねものく者と見たり第三ハそのふ

をりたふりく紙の松を浦なてくり

なり海人のるらぐ見吹く鯨の岩をを

告るりきく附合の本旨みなりゆ

花の伝かさばふみの花めつらや

ゆくやたらむ庭は第木(ハキギ)

七夕の八日八もの〻けちびゝくて
発句八ほゆのまゝなる歌仙八その始ふ歌
三度の第本をおゝくや掃むてつゝみを
星要ふれ恋然〻〻〻て たる(ゲム)その又去
なり度ふふ笹(カヂ)掃の業などのちらぐり
て七夕のなごりを見まる風情歌三ふ
〻見えゝりも花の位よゝちゝさだ
名人の手傳心をつくべし
傾城(ケイセイ)ゆきゝなぶらむまの蓑(コ)
所作だりふかめのたきもの

吹きゝ徒のひぐれ
発句八其角なり 滑稽(ダジャレ)
不羈(フキ)ふ〻世路を厭むづつねふ吉原
なごりふ青樓(セイロウ)俳徊(ハイカイ)して酒徒手束る
るを好ゝりる句ほゆまゝにかゝ
ぐ本情の句なり 歌八発句を一擲(イッテキ)千
金(キム)の子(コガシ)と見なゝ歌ゆふたきもの
まる驕奢(キャウシャ)をいふ歌三八俗の引掛て歌
ゆふたきものまゝる八なゆ人ならぬまゝ
けゝゝき人乃やゝまゝふゝりなの たを

きらぬほどふりくれば　其の庵
火たきつける外　宿のうごひき
一　手の付やうハ夢に　おさまりて
発句ハ俳人の住ま　脇ハその場にて感
じつまる事を覚る乃作鳴の似合ひさるを
定く清閑の趣をいひ　第三ハ農家の
となして　夕の営出雲前の家と定
先夕を云白まで　つけると
あらねもさづらふさけバからびすや
酒もひならふ　此ごろの月

藤袴(フヂバカマ)住窮屈(キュウクツ)にめでつらむ
発句　脇ハ先人の上をきつけ　第三ハ酒も
その庵此家と見えて翁だちまハかくれ
窮屈なる不自由なるものをえらめ住
黄菊しきつらねると　たはむれるた
まふとなしたり
雨もれ　栗の花さく　此見る家
いづきの草に　帰出る　蝉
夕餉(ユウゲ)くふ　綱が　前面(ツトモ)に月前て
発句　脇ふさき見えなし　第三ハ四家の夕

[illegible]
[illegible]をゝ習ひ[illegible]かつゝ学
市の子どもの[illegible]ゝる麻布
日[illegible]てゝ笠をならべる涼しさ
殿白[illegible]おゝ[illegible]し紙もろの拾ゝ[illegible]三八
[illegible]ゝ[illegible]の暑[illegible]中ゝ涼しゐる
[illegible]しゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]のつく[illegible]さゝな
[illegible]ならぶ[illegible]むさ乃里
みゝ[illegible]ね階子の[illegible]をつゝひ来て

きゝゝゝる[illegible]ゝ[illegible]ならむゝ
[illegible]様や水田のゝ一乃秋の[illegible]
[illegible]ゝる日ゝ代[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]乃[illegible]
発句田野の秋を画[illegible]ゝ紙ハ[illegible]
をゝくゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
の優艶なゝを[illegible]ゝ[illegible]
てゝ清聲の詞[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

年たゝを盃ゝ 松乃花かくむ
膝ゝのとゝる 琵琶の声ぐらし
青の月よゝ森る人ゝ宿りゝゝ
発句ハ主たの住奥に曲水の宴乃弊び
をむゝたハむきたるゝ歌ハ女房ゝ平家なゞ
かゝわ出ゝるちまゝ才三八物ゝてきづら
なる泊ゝしゝ泊ゝ月ゝ對ゝて
琵琶かさなゝ歌ハ風流の文を
人をゝゞめて奥ゝ深きを知るゞゝの琵琶
きゝゝゝもせぬさまゝゝ鼻高ゝゝ森

入ゝる者ハ小ものゝきぐゝ
新春ハわざゝきゝめぬ首金ゝ
まゝぐおゝ屋のゝ平ゝゝ
馬 時のゝゝゝ法ゝき 梅の花ゝ
発句歌ハ先ゝいひつゝ三馬 時ゝゝゝ
俗なるべゝ句ゝ
雪の松をゝちゝゝ
日乃出る苔の赤さ
下ゝ者をひゝ松傾ゝ
発句ハ雪をゝの松をゝくいひゝ歌ハ

冬のりの松をぬけて塵ぞ積りあるかな
はるぐ〳〵よりの白八絣をむとりたるばかへつて
第二義ふ蔭弁三八〳〵ゆわき名高き白之
公白この白をかぬる〳〵さらみ松きく〳〵三上
までまく〳〵れりるがつひふとの差の才三ヶ
出さるるとなりよりの白なのるもうべと
西相ふ今ゆくや小汁の星れ苔
笛の音氷るひつつさ乃稽
ひく〳〵番霍の来〳〵森る松ふりく
発句紙〳〵もて古洞なるふ才三八めでた

きこ凡弥なり弁ものもまた松ふなり
松枝ふ来くひ何のげるみるぬ
陸松もしろく〳〵けるる菅聚
ひく〳〵ちらにぬげる松言八下ふ風
発句紙八きこえたるまこと才三八名の絣
なりと白ものいらで来らむ絣きば
いけく〳〵立春るけ出ある嵐ふ
あるのまさるのの来ふぐら乗
大松れるぬぬちにふ〳〵て
発句紙あるのゆのりたる才三八よく

ふるゐの方ぐゆ中公卿のたちらくく杉ろう
うたゆきぐさべくべ立味とらむとまるに
くくべたし志ばらくくをつぐむのく
牛原き村のたるぎや五月雨
きく茶ふき切　梅雨の花
一
故の蓮ふ屋森杉ほのゆく
桑白ハわづなるるを杉なるくるく
くるたるを煮紙くらひて煮紙の化夫
ふかるる白茶ほ　紙ハ真ふるて村ふたた
うさ梅雨の末なるべし　才三一枚の

蓮ふ居くぐふくめいふ屋森たる大末
の信濃ほうゆぬぐし
茶ま信ルをたみ出くく紙の暑さ
暑松ふ鉾の　ゆる立る茶午
かちるの拾ゆゆの人と吐くく
桑白思つけくる紙ぐけ志屋の信ほ
思ひやるべし紙くくたるゆたま才三七う
のゆくゆふく住思ぎの出るるべし
うふいき稲の種なくの旭茶
居もたふきぎ　湯池乃水

白砂の中より 碁 うちうち矢て
桑白ハ古代のゆゑうなるをいりよめでたきう
ぎわ之紙れもてハたどりしたなりひのべた
れどそこ古ろろよハ松ときよいりひたりかく
るめでたきち代ゆゑうなる国とてたるも
えあれどそいふうろく才三ハ引時ゞて
白砂ちのうちより赤出る碁の新しきあ
きでゞ白砂ていふ所ゆふひ所り
松風ふ新酒をさすれ数きハ
月もかうむく 石垣のうへ

所の門迄ゞ 蘇乃 乗ゝゝく
三句とも句えん形らうあり

第四句の証
二十五条に曰四句めハ体更大なるの物ふと
雅ゝゝしくハ発句証才三まで不背おくるる
かとしるべしいやわ句きるやゝにいひなした
きど一巻の意ハ化ハ句すりたゞまるあふ美
物一合とハ体したるゆゑく
歯朶の葉を初物人乃ちる夏て
ふのはつ花おしほけの春
才三ハ早春ふたゞめて物きる人ちゝが
歯朶の葉を矢のゝふうけてゆゝゝろふ

らむりろの物人の藉を引て園のる
なのゞふたゝまるる時ふの門をおしゆゝる
りゝきもゝえハ又ハ物人ハ侍原のわざ
ゝゝわたしたるやゝてもきこゆいづ水ふ
たゝろハたゝゝゝ茶めいちすき物茶
をつけるゝ
四隣わる物の童乃ほゝふ
ゝ原ふ宿うハ休の中道
ゝもゝろき附合なり才三ハ物のまわざ
の物るゝふゝ原とハ思ひよるまゞさ五休

の中乃宿ハ世ふたゝびものゝかゝるかゝるとて伊
ゞ夫ゝどが袖のきゝゝ見むとて又ゝび
てこさをたゝるを一枚の宿をしゝろふり
りゝ四螺りる坂ふとゝ家とハつきがゝきゝを猶
といつる一字ゝゝ甚ゝひゞゝゝゝる
かへる鴨かへらぬ鴨もたハ立ゝ
七曜山を　出ゝゝる　月
たゞりしさをつけゝゝゝ七曜山と山の名ふ
きゝゝる伏ハ河し山を出ゝゝゝゝゝゝむゞ
水せゝゝゝ屋森の石やなふきらむ

篠ふ絲の幸　生うきたり
者三ハ生ふよゝゝ伊ゝゝふて家の前に
伝ゝ川ゝり廿川中ふ石をおきゝゝ夫
ゝゝゝ屋森きゝるたまゝ四角ハきくに
廿河ゝりをつけゝるものふりかゝゞつゝゝ
つけるも一祈ゝ
月出よ冨屋をかゝらむ酒もちて
民の竈のけゞぶる秋風
者三ハ光よ冨ゝゝ安りて酒きゞのゝ
河ふなゝるゞゝ者の月乃ゝゝ出よ

酒竹笹もちゝく伊の茅屋をかゝめて月
を見むとゝなゝちゝちつれゆゝきに白
めハ茅屋ハ武蔵野なるべきをふゝ
月見酒もわなどの拍子ゝるべきをふゝ
らざるを泰平の世代なれば茅屋を
かゝめて酒もまゝハまゝるれとゝふてろよて民の
かまどハふゝぎハひみゝゆとゝいつるを哥を
たゝるをりかつハ芝秋の豊秋なるをも
ゝるべし名人の俳聖豆一ふゝらむや
村ゝふ市の伊屋を吹ゝゆて

町の中ゆく川に舟とゝの月
才三のけしき村ゝふ市ふの吹そひゝ市
のかり屋も吹とゝらるゝ市ゝゝ市ゝゝ
句めハ屋の面ハまゝかゝゝぬふゆゝゝちの哥
ちゝゆげをゝくまめる月ゝるゝいふゝゝるゝて
さゝゝゝの古風大ゝもたちまちゝれて月
のゝゝゆまゝゝるゝゝゝ町中の川ゝゝ
ゝふゝて面倍のゝゝゝゝゝゝゝゝ
旅人の秋かゝゝゝゝゝゝ春ゝゝゝ
ゝたも ゝゝゝ 左刀のひゝゝゝ

雪三のきさ白くまことふ仏偈のをうみ
なるべし四句めはその人ぐらを引るかし
たりきべくく偈句ハかるるゆふさろをつ
くべし風ふちをのつくるものならバ
いつも附合ハ初ゆべしく花ばるべきを
風ふたりとつけるハ仏偈の彩しををこ
義なくををを去るべし 山陰に能ゆれは
おーくををし
掃よをて消る雪をやかをふらむ
石のくぼをに墨成 摺りり

消るる雪ををしみく掃よをてかをふ男を
風流のををを見て石のくぼをふ雲をを
をて雪のなごめれ詩に奇なをかをさ海ふ
しだれ
投りをを嗽の編擂 をかこめて
風見楼ふゆく 月のかぶの
きをををるゆ あるかどよをさ句
雪屋敷の火 縄をゆるを附ふ
山の石ををを乃 陸きをゆをり
雪三の春ろハ内るをふて四句め雪乃

何ハなれきてれのづらなる春ろこのを
まてをく季まの紅乃梅句ハかくなるべき
るのあり
義入ハたゞやぶいりと見をけて
すぐれたるなから第もつなり
人時世繼二句のるふつくをり
暮をハ元れく梅をけ絶く
門ふ顔出さて月のたおらし
第三いなるあふ光ハ元れく梅とつまと
ハまるれてれくにけハづまる梅

を暮をハ元れくれもろくいひるなる
まで四句めハろのくりをとさく春
ハるれのれめ紅ハ月のたあよかける梅ふ
て暮をハ元れく梅なるむてつけるもの
なり一句のくろハ下屋なのの意
門ふ朝出くれをこるけまく
紅月にむふ会紅梅吹立て
遠くのくちく梅る生もの
けるくろもなるむ
家前俳を春のまきを元紅

上のたとりに仏ぐる米の恵
これハ炭俵の一編なり家業を怠る者を春
のはきさふとり自ら人ハ米商人の仕
合よくく罪をもるる米も仏事ふ恵上り
きるもまこと

第五句の新
霜佳見る宮の月かさろなり
風吹ぬ秋の日 瓶ふ酒なきる
古酒ハとくからのちゃをいるるの松尾し
お白ハ詩人などの宮芭蕉ふ獨坐しく月下
の霜を踏あるもまこと五句めハ秋の
日乃ちびしきに風も吹ぬ瓶ふ酒ハ(なき
寂莫(ジャクバク)のりたる瓶ふ酒なきの)ど詩ふよ
くいふるのなり
秋心立に宮をやつき新秋

海上船遊

四句めハ朝顔（テウテキ）の花のためるれうにひろふ
宮を蔭しまの月をあらそ付接合をめぢをく
高砂かくしきる軍出のれもうげ之五句
め張よてさろ雲べきたれ水船雲子旅合
なるになく人をらぬ義人とをうり
七曜山を出りて月
所づくり栗のこげる 砕だこけ
きこえがくいうぐ
砕くき人の肩ふとりつく

けるの賀れいで面白や 能子ぶ舞
苔白酒ぐくめぐりて けぐめしきを
賀の芝と見るる 俳合なり 老（ライ）苔子ぶ
をるを子くめるるろをほらむ
いつろ烏帽（エボシ）子のぬげるまを凡
成るやら馬乃ほるぬほくを
四句めハ貴き人の姿ほろびなるを
白め白馬（バリバ）驕（オゴッ）くぶぐくふを子の去を
をつけくり
昔年大内まる乃原の雪

入月の薮(ウラ)に竹(ケ)の葉(ハ)ゝる底(そこ)ひゝり

花白(はくさい)の雪(ゆき)のたゝなはるとゝふ俳諧(はいかい)の句

ふてゝ又(また)を習(ならは)ゝ

くふ習(ならは)ゝ雪(ゆき)ふぬ[illegible]ゝる[illegible]白めゝ[illegible]

を落(おと)ゝ見(みる)ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]の者(もの)

又(また)ゝ[illegible]ゝ入月(いりつき)のゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

えねど[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

しからぬ底(そこ)を一猪(イッキ)首(くび)さゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]ゝ人(ひと)ならむとの俳合(はいかい)あり

門(かど)ふ顔出(かほだ)さゝ月(つき)乃(の)たゝ[illegible]

雲(くも)行(ゆく)も秋(あき)のはゝをたゝむざ俳

諧(はいかい)白(はくさい)月(つき)のゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

秋(あき)のはゝをたゝむざと俳諧(はいかい)たちまちかりめてかき[illegible]

星(ほし)ほどなくぢむざと俳諧(はいかい)出(いで)ゝ[illegible]なかの

天(てん)[illegible]星(ほし)[illegible]ふ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]俳諧(はいかい)の[illegible]

[illegible]星(ほし)

[illegible]ふたゝむ笹乃(ニノ)細(ほそ)[illegible]

柱(はしら)木屋(こや)ふ柱(はしら)木(き)ふ影(かげ)をかくさむ

[illegible]白(はくさい)を柱(はしら)木屋(こや)の屋(や)と見(みる)ゝ俳合(はいかい)之

柱(はしら)木(き)おぐさ[illegible](シノ)陰(かげ)の弓

まいらとふ　蓍こと　る　蓍乃月

四句めさへめくちびしきふと見くまいらと

ふ蓍のひかめくへ人も住ぞありくる

吉屋安乃内まねきぞきこえぶの看

所うちたくくうるめ　一枚

きの筋ハ紅もみらぞふ自由ぢよ

紅のきゆ伊勢なぞふ下る時いつもは何句

を思ひ出くく涙もこぶるぞだり吉人乃

きくくくなる恋り句えぶきこえるま

なれど道中のまぐく目茶

なら屋くくうれし　十の盃

ふ代酒べきものをちまぐくふのるく

お白十の盃ならべたるハ光の酒まるハ

何らで子の白れ盃なちむと思ひうりか

つたで人のふのるハ何らぐとそとの

紙ふつけくり一句もこれきぐ彫る句ふ

ていくめでたき句あり

鶴　休　まぐる　茶をつぐく

鶴が一のぐるとやぐてくれの月

四句めハ鶴まぐりの茶をつぐきく

家路ふ伯るゆ多ぐれの寺ぐ五白めハ伊
ゆ寺ゆ多く多ぐれと見てるのゆ伊
白るゆかく寺らくとき天ゆ寺く多ぐ
てのやくれくまゆもちらゆる白を
正月の多ぐ中といふゆるゆとかろくしく
なみて

歌市ふ人のたてる夕月

京刀の音きゆ天くる居合ぬき
伏見大津なぐらふふ都會のゆりさな
解をまくぐ

上のたよりふ伊ゆぐる茶の壺
雪の中さらくとし月のや
第四白の新にいつめくを白めもやりり茶
商人のロ和の時ゆふ價の高下を考
るゆまく世よ お場ゆくいふものるゆ
をぐろれかうとさろろよろふくれ白
のれまくハきくゆ天くるまくく
うつとのぐけバ 酒の元中
森不ふ住も森て居ぬ雪の月
茶白一百のうちふまめくとくる春の

さるを片ほとりとつてのぞけば海まを
こぎ中とおりて云白めもろの地を新うち
さで奥の産業ふめいく乃森ふ城つてある
ぐら人ひとりめ森てある者もなく月ふも
うひく匠のくるこつけるこ

混雑の記

袈裟法ふ為よ敷のしたよ
紙よ えぼしを ふるよ 紙衣

おるもい一るめしく外ゝ栗の仰諸八解
がくさ為り 共白侘逝の志と見くく敷
逝ふ烏帽子をぬぎく 紙衣を見る人宦
を辞一たる人ふ逝ぬ 肝を 集ふ
為ハ逝くが 肝 兎 を 集ふ
雷鳥の初ちるハ 角成るなら む
おゆハ韓 逝くが 朝州 ふ何ゆ ふるは の人

ちらむら桜白ハ遠うとつゝみより 遠うと盃
東路を送るの序ハ別るゝつゝみをたた
てたるよりくゝ別るの字一字の俗ゝゆ

彼蕉 選つゝ 詩のことを吹
朝鮮ハ西海を 獵る 蓬来
附えハうで ちらむ 解をぞ 桜白ハ大関の
ちゝりちらむら
樽 入をぬ 氣ハ六十の 荊 ゝゝ
出 所ハ 胡産ゝく 世を 夷 ちり
苔白の樽入をぬ人を男と見よゝ 書ハ

ハいひ人ぐ桜白ハ苔白ゝて男ゝちゝてつけれ
苔白ゝて八女房ゝ ゝゝゝゝゝゝゝゝ八
ゝゝゝゝを樽けづらで ゝゝゝゝ相産
かゝゝゝゝ ゝゝゝゝ夷ちゝゝゝゝゝ
山聖ハ 剣ゝゝ 餅をむさぼる
盗ゝ井の月ハ 俗 夷 ゝゝ洗ハ
苔白岩の緑 ちゝハ ゝゝらでハ粗の人ゝ見ゝ
伯夷 首陽山に巌をくひつひに飢て死さ
るちゝを思ひ君ゝハ渇ゝても盗泉の水
ゝ飲ぐゝいハ語を引く飲ゝゝゝゝ

りそ伯夷のめきはぜ潔の人も見へぬふなら
むと陽春の何之盗泉を盗井とかへくる
も仮潔ならむ

嘆(アケギ)の森を毋ふ内まきれく
つひふ桑(ホツ)ん(ニム)なら
おの白ふりくてみくくるも出ざりしるを
嘆の森を毋ふ之ぞ去らんぬ
のさくとめる狂之怪白ぐふ甘る故
つけてとても立しきんに去とげられぬ多ち
ルバ世るくちまじりてなるくらへをむ尼

ふかるて世を毋ひたるふれむなど森をふい
ひるを毋のさくるきくさんぬくふくき
内めにまくるるのをでめたるたるくと
ルもくる一栗なるれどおの白てられへやまで
らるてきくくりやさく

擂(バイ)体かぶる　ふ毋の毋
すた河きれのうえ乃みだらきふ
二白清聲なりさをも古調
月の彼かくろぎ嘯(ショウ)る猿の上に
鳴の羽えびる　秋ハ陳をなる

孤しらぬ僧をかなしがるふら草 蓬

月の白さはめくく蕭條たる不と見く時の相

なるふ扶ふけさるりさをつけ後白猪ゴて傍

とはなれ形ごらも後の世乃てこるりをこたえれ

ぬ更ぬ法をを菩薩のわらふふふ傍稽

なるゴで落ハ石のりれなるものかさりこたる

ものるゴゴこうはいをこふをこ

時ゑ山崎 金華 を舞

仏世界のごてらを蓋ふ傍なく

ちるるもなりや

猪ゴのををみいるを更を

一の姫里の庄屋ふやこハを

苔白苔更ハ猪のかこ乃ををなぐめて相思

ここ猪ゴのかこ乃ををなぐめて相思

へるけよ後白ハ其相思ふ人ハ一の姫をを

苔更ふいひなづけるゴ有りゆく星の光

屋にさらりれこるあらむ

鵜 名をたつこふ 頭を 責ハ里

時ゑる 後の 男こ 常ら一り

苔白 猪の 頭 を 責るりゆ

梅白ハさくまへ
浮世ふ 侘む宿 の 蘭
皆ハ花負蕉 笠ハ内む 俤
附合ハいとゞあらむ白ハ笠ハ重し 呂天の
雪といへる詩語をうく 仙酒ふ したること
芭蕉 ゆるしの 蛙 たくこゝよ
鷹ゆるといふい 大もらハぞや
芋白芋角が 重なる 公ふ みぎふいひみる
ゆり 梅白公ふ のぐゆをひてたりふ 芋
角ふ へたること

鶯入の 迎づ まふ 初きぬと
ゆ うひむぐ 皆らしたり
芋白ハきぬに 鶯入の 衣たちなる 用
立をゆる内ま 梅白ハ 禮を 塞下の 曲て
つゆる古 洲の 麺と
鳴ふ 黄金ハ ふ 紫を 懸る
里 細くこ れ めぐ 能
黄をが 布 ハ二白を あらべたるぶいる
ふつし ゆ すりあらむ 形ぶつる 芋の
白ハ 鉢 ゆ 白の 轉 いる 発

句の巻乃中の句にて出るかちぢきのたくひ
やむぐ暮うらみ有しといつる句の後句なり
後の黒細の句ハ詰高人手を負る酒使
くるといつる発句の紙此句の表かちぢ干
ぢき裏ふ所をゆるさらむといつる句の後
句にてもくすりゆ回ど巻ものらぐぢ片ぶ
黒細の句ハ第四句の終ふ入るぢきをいつた
しくは二句をバちらべるむいくきひがこ
といふぢし

梶葉ガミ紫ザ宋標の角を巻打む

麝沸を使とさて荒海の岸の
苔句ハ瑞垣國なるどの俳名は東のさるもの
後句もそのほくりふ麝沸を打ふ巻の句
らむとの附句と
狸の弓矢猛き世ふ出よ
虎懐ふ妊る ほのゝつき
苔句は猛き世ふ狸の弓をつぢき英雄
出よと後句虎を懐ふ子ふ産て
妊ふハきハめて狸の弓矢を生むとくからの
句位などふ打ふ句なるれもうげ有り

山寒く四隣の森をふく風
うづゝ火きゝえゝ　指乃ゝまーび
いゝでちらむ解きるゆゝくハぞ
酉　仏を　像ふつてむ一のやたゝ
哀いゝふ宮　塊　ぬぐさ　吹　洲　るらむ
お白ハ花女なぐの赤ぐく後白のぐゝハ萩の
ひるゝことばなり世ふ萩の花ゝいふ餅をぐゝ
解れ萩ゝもねたるるてハらゆゝ
みちのゝく乃東　ゝらぬ　石臼
武士の　濫れ　森　アゝらん

前白みちのゝく東の石臼をさゝ見ゝらぬ
後白ハ東の安ゝなるさな　菖蒲　城の大君は
いりぬひし　俵　ぬらむ
庭のかぐり火たゝくるたそゝも
家　女　石　むのち　像のうち　家を
庭のかぐり火乃氣ふきらふみ石ハ後な
らむとゝふを意白ゝゝかぐり火を漢土のたく
火ゝゝ玉のち　漆ふ宋女ゝゝたハふれむふ
凡情ふなるる　附白
おろさぬ宮に　枝　のぐゝ　松

傘（カサイキ）の詠

はるかくらかとぶけく
はの白雲のたれるさぬきの山を傘ちめど
はすーてゐるあとはさるる時白く
雲をたつ鎌倉山の奥深し
えばるたまと成　白ふ風葉
はの白八雲をどと和仏ちひく極楽山の
わくふ川こまをたる人ときえ又八かまく
ら山の和仏にちひをきてたるもこゑ
いづれわざやうちらむ極白八いづれも思
ひ入りてえばるをもふ又風葉の白ひ

白ひ雲りくわりゆくく人　新月をぐこと
もふせつたる雲の情事
磬（ケイ）つ方ふ　鳥　海る道
樵（ショウ）の薬よ赤ゑ（ブシ）薬成之詠
花白磬つかふ鳥の海る情事の地い
ふも恋士ねぢけ人の住居をあくりと空め
世ふも人よも見をぐ月をとゑ薬成之居
るけまの海く樵の薬ふかくハ赤ハねぢけを
ざ赤ぐあらの薬よ赤　乃赤　たぐ拾（モ）根（ハ）
よてわの薬ふとゑ赤を同じるすりけまぐ

梢の芽ふふ奇かくるものの面きバ緑なきふも
ほらば

風の音なら ぶ 薙(ナツ)鉄乃へうめく
大口 笑ふる 庭の 雪 掃
茶匂 薙鉄の大なるがいくつも形らびて風
の音ばいうめ きまでの庭ハ平人の家
ふハほらぶときて庭の雪掃ふ大口笑を
ふる大あの ほめきを つけるものく
みり をのぶるから 掃 ふの音
微(ムビキ) 花の 孫ば 枯さ ぶく

いうなる 附 意形らむきとりかぐ 古 調ハれ
ほ ぬかるる 食 を
世の木を画ふのぶふるる 年の 極
妹ぶ ら 乃 からわ 古 た
茶匂ハ画師よハほらで画をぬ 世 るまかく
ハらでかと 一 ひ 茶 城 意 て 画 ふ ふ わ 雪 屋
屋 ふ の ち ま 後 匂 ハ 画 ふ ぶ る 女 の 髪
ばかうつ ふ ゆ ひ ふ る ふ い へ る 附 匂 ふ や
茶 城 ウラ ふ く 室(ヤ) の 教 風
津 の 国 ば な ふ ハ く く ぶ ふ わ て

前句ハ立人ハ面りぐのゆゑ〻ゆゑ〻く松すで宝
ゆゑ〻りの森〻てゐ〻百姓のもれ松まい
〻く〻く岩路いちやらむ〻たき〻ちまるり
恋句ハさてたちよきゆゑてたで松のりきを
つけ紙ぬ〻りのゆゑのかくきるゆ越いひ
たるのゑをきど立句の次ゆつのゑれ紙
ぬとやたし〻くいひ〻ゆいとらひたるゆ延ゆ
ゆゑ〻筆ゆさつ〻ちむや
俳二かさねえすゑゑ常
言葉のちるゆゑのゆれひらむ

前句ハふゆ枕のゆゆ俳を用ゆるゆ源氏
ゆ語などゆも面る俳ゆ〻ゆまれかすれえ
ゑ〻ゆ〻るいつひなるべ〻恋句ハ言葉
の枕女乃いりひるゆとめゆたる
わゞ庵ハ野るゆ宿らさて面〻ゆて
賤女やさまをみてぶ身のほど
冬の日れ俳ハ家〻の注書出〻ゆ
〻ゆどけつけ句を面る人の次ゆ野ゆ宿ま
庵の人れ賤ハやさ〻見るハろ〻かる人
を庵ふかくまゆふさぐ〻ゆ〻へるいろで

きえぬ雪は袋ふきごくと法
新法の焼きしく火を焚く
芭句中しみ雪は婆のみ字乃きえゆき度
べもの思ひも落らめ〳〵ふ俳八目の前ふ俳
俳〳〵かすし〳〵たと〳〵あるべ〳〵俳句
墓さの火を焚ゐるけまえきえぬ〳〵いるふ
新法のひきぬ〳〵たが〳〵
二の足ふ遊郭の花乃ちらめきく
餅八ぬぐらふ〳〵ばうり袋うむ
芭句二の足と〳〵ふめ〳〵し八郎兵衛俳

からばうし人の君もうしをぬひてみづう
らを足とあり君乃ぬ書捨とふちひあ
ふ人ろの足ぬものくめきく人八君意
蕪〳〵ら或八むうし八ゑづり〳〵きし人の乃八
里ふ下ゆ見ぬ俳句をまぐれろの人ふて
多八味の薩ふ書あるとかとち法さふ
今ぞ松の矢を放つ春
盗人の記念の松乃吹をれて
芭句八思ひまうけ松乃矢をはみつふ
たぐその京をつけうるあうし

面のしさの遥なるをけし時ある
秋水一升もてこさせず
茶白ハ秋さぐら遥くなどゝ捉べるを去
さ秋といはむとて秋水一升とハつらひくるく
水時計のるべしあのれ仮諸ハ
まのゞ古酒の傾鳥面をくかくむつりく仮
りくるれかゝし
巾ふ末摘を
早の砧とふらふるのゆゞれみ
茶白ハ詩人儒者などのからあるさたる歌

なり牛太人の面のげつらひ升ハが使祥い
とよし
庶ふけく語れバいとなる男
緑ちまたげの紀を詠もし
茶白きゝえたるまゝなれどをりたれと
後白ハ出いとのためふむり緑ちまげ
られくるるるゞ思ひ出くれあるさなと
ヒニ白たれもく傾城賢女のるふと
めれどろれハろとざろるところ面のるべれ表
ふたくく使まるハとつくるし

明日八敵平　首　おちめをむ

小三たゝふ　五　こらせひとつゝこひ

茶白八まことに戦場の白なんど接白を

陣中のすゝくハ何のこらだ出て公用八

俗白八茶白のすをかへゝ去りきよく附くる

抵多しけ白のこゝろハたゞ陣中の席と

碎意のたハふれふ敵よ首れとめ出るまね

ハどゝるけまるてゆ三たゝいふ名ハきよれ

他名なれバ軍出ふ何るべき名をこゝること

拵おふ餅きゆる室ふのゝるる

賞　起　と　鬼の燭　ゝも　ゝ　ゝ

こゝれハかぶろいくこらのまぞかハゆきゝつふ

ふ拵ゑとつけゝれバ拵女の室れ面きふ

るゝ明らゝ　接白八拵ゞゝかの拵ゝ義

成一きハゝちゆゞめるゝふの室ゝゝ室

白へるやけきけゆまをつけるこ

三味線からむ　子　孤の家人

道きゞらゝみ法でおけゝる墓を立る

凡粗の旅人なるゞ

用ふたくる庵脳の繋れ赤拵て

変きゝ 石 除(ガイ) 俳をまつ

こ小八所 家更(ガ) 解いとす

苔の一夫つゝふ 幸 ほつちゆ

決より 硯をひらき 山信ふ

山のたゝきまひ 孤(ゾツ)つ 法のりきあゝふ

見きぐ一が(ゾツ)き 孤(ゾツ)縁 寺ハバろくらの石

千 縛ちかけり 旅 沢とりあいて 行るハの

寺ハよむきぐ

灯 苔 ふゝふ 情 くらぶる

寺ハ 苔の寺まふ力を 撰(エラ)ハず

灯 苔 ふゝつとつ上ふ 寺 苔と 苔と 對一たる

何のハなるお 撰(スウ) たりゆ

まゞきき 近 津 法の 水ふ 苔ハ行

佛 喰たる 魚 夫 ゆゞ 紀けき

つふゝの何とふ何ゞたる 大魚の 佛たく

ひたりハ何ゝまゞ 射き 慈 向るゆ 何

くのあゆ 何ゝくの 佛れ何ゞらたるひ

たるなゞ 古 おゞゝゆの 体をはゆや

玉(ゲムゲ) 孤(ゲ) 古みき の 畠 ゝい及

ゝ ゞふ 嘶(サウ)る 寺 苔ちゆゝと

春色目前

雪の粧ひ乃園の梅をめづらし

襟(エリ)を高(タカ)く擡(ノ)げ片袖をとく

おぼつかなき雪のたはむるゝふ吳国の笠ふるゝ風

騒の人は伽乃引うへ〳〵伽楽器のたのもしい

ふしなる低音わ

けーの一音ふ名をとゞめて弾

三日月乃東ハくらく侍の声

徐(ダイ)台ハ一きげーのさゝ声をたちかやゝを見て

大悟(ゴ)したる古ゞく悟台ハ三日月の出るゝ

ハくらくて侍のごむゝ出るふいよゝ社人堂

固(ゴ)をたゝるゝ

おぼつかなき寛(メズラシ)　花のかげよ入

ゝの望(モチ)れねを赤かもれなゞく

花にこゝろ入く寛花ふ入を西行ゝくねが

いくハ花のかげよて赤死むそのきたるゞ乃

望月の沈ゝいふ音を思ひ出ゝく西行ゝそのの

望のるふ赤死むゝいりるゞ松のしもれるゞく

ゝのるに死たゝゝい〳〵る伽の伽ゝすを西行を

うらやゝたる公和のさらりゝゝるわ

於らんかくねるか磐の敢き者
火たりぬ火燈なれたれ人なれ見む
前白八磐鳥ふたぐ〳〵人のをくらかるる恋
をいひたること火たりぬ火燈にうつもをさまま
じきものの〳〵なきを人の伴きうてふのら
りるべたけきあらむふ前白のをくらん
たる恋ををひりかるる人にしるつけねこ
冬まつ的豆たくなるべし
花ふ位桜の御〳〵きてふりる
前白秋季なるべ花をうけてつけ

たるものなりの白こハいとくなるむ解かく
西南ふ桂の菊の花乃つぶむは
菊の一のぐらふ炭木うつる
前白桂の花とつふて月をきをたるよ一白
の根解からめきたれば菊の一のぐらの新き
ものをつけく一のつうひたるこ菊油菊膏
くて注ふくるあることぞ
敵を白系 無 菊の
宣の日乃且を飛流のく死て
前白年菊の一ないづちるや又ハたぐまくけ

たるみや後白河院法皇の御所なりしとむとての
いのりは寅のゝ起るゝ所なりしとぞ
ほたまちか
鄙さくる曉（アカツキ）ゝ花ふかしこまさ
特（ハロ）ゝ春風
花の下ゝ
花白をよしのゝ言なぐゝ見るくめいゝ曉の
鄙ふむらひゝるはまぬ軍の出立よりはら
ぬぐわざやらなぬ世なればかりふを花の
見をさるるゝ仏の下ゝをうちよりひ
たるまぐゝ

殘とは主重　菓切手ゆく
秋の沢旅乃ち連歌いとかりふ
砂とる主重の菓さりふ出るはいとをちを歌
の席なるべりぐ白のやゝさちのゝ杉ぐ
ろうなるけるもはらぎれば旅のちを歌いと
かりふゝ出るりたるゝ古人の人を用ゆる密（ミツ）
なるる東
暮除き　山櫛（さくし）ふちくちり見む
麻（アサ）　加（カ）まゝ　つふ　ふの菓（シウ）　ほむ
おのうちのぐゆる不ゝ見て奇の菓拾ぢ

体家につけてる家りゝ麻りゝハ俗の他名家
ゑど草刈にも菰刈ともいふべきを麻りゝふ
夏をもさとなくむうしかゝる集もはるべき
やゝの名をつくりゝる去ゝぬく
籠團 ゆるて 本氏の山はい
皆を見てそろふ泪ぐゝ折りへり
空團の人をゆるゝ本氏の山はいをはる氏
祥皆を見てわぐゝほどなくかくなつちむて
かなゝめるもつゝものゝと蓋屋の人とゝ
体つけ合よや

けゝ花のふ訪まりふゝちむきて
をゝ蓮の実 なゝふ草の実
体ささろなし
豆腐つくりゝ母の裏ふ入
文政の草乃 袂も 彼ぬ屋
体ゆふ喪ふこもる人を体葉の文政と見てる
附合なり文政八母ふ者はゆゝ人
ひゝり書を養る葉の戸はず
二丁ほゞ西ふさゝぬゝ抜きゝ有り
ひゝり出なよむ葉の戸ハ二三丁も村家をへ

だてたるなり

柳の風乃豆がらをふく

寒き炉ふ侍ハひとり柿むきて

茶匂いるも荒さるの賀しげるやゝさて住

柿の柿むきるる寒き炉こるがめし

小僧ふゝりぐかゝさまわりる

紙の法ふ左ふ左ふの法をくゝ

耒輔の紙鮮人ふ函をかきゝ左ふの名法

を飲きる砂ふハふ僧ふゝりぐかゝとまわりる

玉山などりふ大さるのたまゝ

赤衣ハ茶碗のをもてる笑ひすり

宮司ゞ妻子一所ハられてわぶ

前句とハ人をゝ〳〵なる附合之芋の白ハ茶碗の

もちゝ笑ひしゝ人成見ゆゝ恋とゝ左ゝ

後句ハ松のきハ茶碗のもちて笑ひを宮司

ゞ妻ふ思ハれるとゝふふかゝる之

入月千驕の名るれわゝる元

駕左き國乃露負ハゆ

いゝちらむ之めがゝ

論咲ゝ芋茶の宮

其二の工夫二日冴える目を吹く
おもしろき附合之伺ゞとよびるほどの碁
うちの人と半うちけゝ勝負いつのゐ言
めむと契りちゝ赤ふかゝり宮のまとふまづ
うふ居て人に蔵ざりしまを二ねまで立ま
しやりゝ思ひつきる赤ふ目をひらき
見れば宮苔の苔茎一編咲出る之
笠袋て衣のやぶまを縫ひ有る
秋の鳥乃人くひみゆ
此句や人を然(シウ)樹(ジュ)まで鳥は山ゆゝ出たゞ

のかゝへ土色ものゝも思ひたらで茎のとふん立ち
しき破き衣故縫ひ有るゝとものと見て附
たる之附ゞ乃八走ばらく垂て一句のやゝまて
秋とゝふ字のゝ赤りたるはゞ赤ゝる
はたらりくふはたらざれバかゝる句をはゝるはゞ
りゞ
美人のかゝちは抱むらげるふ
蝦(エビ)夷の賀(ガ)茎奉赤ち蝶ゝ多を俺ゝ
豆腐君(クムゲ)吉るを子ゝみゝくの他之
ふ名高しゝ廢(コブ)の咒(ナジ)咀(はと)

冨士の根を笠に見て馬に乗ながら
きこしきこえかくれど隠ていりで面白ハ京を
居て庭の呪咀に妬を抱くる人之様向ふ小
袋蒔ぐくこの冨士乃根を笠に見てくる
乗ゆく何やしげなる男ハ京に君なるき庭
の呪咀妬ありといふころなからむか不於さ
やらなならね

月面く圭（トケイ）のひゞき八ッ鳴て

棺（ハヤケ） いそじ 消ぐくの露

其の白月を面白くと西に傾ぶき圭をきけ

バ八ッ時といふものをきゝげしきをよく見定めべし

人の旅寝る宿にしたり

高（コ）麗（マ）の縣（アガタ）に 畠 つくりゆく

紅 染の 唐（タウ）紙（シ）干 花の色を 徒（こぼ）り

何ゆの古のてなる附合なるべし

酒 飲む 妓の いろふ 淋し た

双（スゴ）六（ロク） 双六のうらみを身に尽くし

酒好の妓よりみのあらるにまふつけゝりき
うふれ双六へよまのみけるをぬくらむ見しきるなど
何ゆて言ふ風ハに八とむらふ人もなし 君ハ

いかになどぞくのけしきくるみゆるに佛しかるらむ
と思ひやりけるはまり
堅下さて往従が姫をもろへて
壁の宮乃付らし故ある仏種
茶臼ハ堅下して嵯峨崇けりにからるくはま
見えくかるすにゆ気付る壁のそなへ峰
まなをつけるる之
藝者を召ぬ名月の界
面白の拍女乃秋の夜さぐらや
まいの拍浴すらハ付らで風流のたりれ人乃

まいげなるべし
川淑ゆく髻(モトヒ)を角に結ひて
舎利とる滝に紅白りつらふ
古調なれバ絆しがしまべく古調にも古
調なうぬ何里のちの調をも古調なりとの淺
よくわうつべし
羽織に酒をかく執様屋
衣よく女に髭(カヒコ)払ふけり里
いるるつけぐろるや
写る九し笛のいろえ乃まゑぜりけり

三股の船屋川乃歌

おのゝ原川の歌を書らぬバ解ぬる事を

はゞ

花遊（カヨウ）ちる供こゞの著書

いゝ原百（モヽ）舌（ズ）舌ハ次矢を負ぬ事ぐら

田野之秋色

月かゝ歩板山を負ぐつらむ

雲ハ歌盗の送堤むすめ

大盗人の今しゝ北ぬるゝ伺ぐ盗人

の蕈（トウ）をむすびゝ伺ぐ北司が家ゝ入ぬ

何ゝ山を志ゝゝ志ぬ志ぐむのものがゝりゝ志

よゝ伺るゝ事

ひゝ川色の孔ゝゝゝ事

立みゐる人ハ蓬ゝとぐらゝゝ

たゝゝ立ゝる人ハ蓬ゝかゝゝ事ひて

人志ぬ聖をいつりかゝきバ色の孔ゝゝゝ

ゝぐゝ

風ゝらき大事の歌ぬ七ゝ事

門を志ゝゝ生 鯉の美

茶白ハ大ゝの歌伺句ハ文日の歌附文ハ伺

月のまゝ之

宿のちゃげ屋ふ 扇子をほる

と京繁ふ 故の書歌 手付く

扇子を拙く宿のみやげふ書る人を書歌

師と見立てる俳句

うばむの髪きる 女房に来て

立を見やづ。 鼠ぐくの月

うばむハ扇ていふるの絵ことばるく黒きく

ふきなどゝ云ゆ面影の寄にたちちね

のかゝきて もうばむ乃わが黒髪ハな

でゞやはりはむといへるを思ひくる髪ハをとゝりの

黒きものなれバうばむの髪と俗諧ふ用ひさ

はえちく俳ぐろハふくちぎりる女の姿

ふまりてりきハかく思ひきくこと花ふ有ると

たり浮世ハたゞ姿ぐろしの中なれハ子

に左りたのゝ形るたち思ハむかるきぐく

一きかゝよ思ひ入むよりハのちの世れす

ころたろろ乃ハ思ひたえぬ

のゝいハむゝ まりしなゞゆのゝてちてハ

と一入忘れ起 たちまち花を見そぶりる

はなあり船が帆とりにまかく 帆はかゝりの景色を
きりしたる之
陰不きて於朝(オゴ)のかづらりに道
笠投くさあに立る 渡男
浦島の御遊のりしたなるべし
うちかづく苦蓑のまへなどなつりを
たりあくく 男と一所にゆく
此句八公羽のことに来高き亭之の句之まことに
意の情をつくせりといふべし 其句八やさしき
ものくはよなるをたでなつしみをいへるなる字

より何の八将じて歩なにいやしからぬ人のた
ハぶれよいやしきものくよねびしたるはまた
なしく意のまことをのべたるえもいハずめ
でたし
入日の ほと乃星 ふくらつ
宮寺が 波投つも 花の裏
星ふくつくつ表のよきどよみえるあたるを
社前のゆふぐれと見く客寄が名灯の波紋
つぎくよゆくきげくをつけたる画も及バず
薄(スキ)を ゆく いたふ ふたり星

現世 世間 麻守よ入簾の隙
蔭を切て笠にふくえき人の船よりの世間
負出く山りげの簾の隙ふ見ひとりかさなら
して麻のまるをまつちまこのくまでえをとる人
なりなる
俗れもしろく 椋の粥 蕨
更級の里乃きぬをおふゆき
うしも松なじえを人の椋はかゆ蕨る俗お
ちらばちらしちの沾おふゆくもろべ
露を相 窟 隠る馬の血

坊るとぞ老ともいはで 遠を歩
土の餅つく 餅の松ろろし
三句ともただくりのてろなしや
生簾に 蛭つく 煙 毒とまり
日くれて 蛭る 松が 切りけ
山家のやくさてるがめし
きく白家塩なた 鉢をつきぬく
泪年 顔をよごれ 目 茶
蕨白 病者の 療治のためる 塩ぐちまると
見くく目 病なつけるを的

舌松ふ念仏をやとふ居士衣
小株ハ稲の中ふつて之
小株下のけまこと
枝でゝつ産所がゝ花上多なり
いぢをふびむや 蛍 枝の月
蕾ふいぢりを對しゝる附句これも天一流
蕊花ふ垣松成 空つ 単宿
かげろふ 重さ 紙の 下 蔵
仲のうさも中ふの足後ふ春ゝちて
かげろふの白ハ苔の松ふのちの白潜じて負

しゝ蕾ゝ人のさゝれど一蕊ゝちゝる男ゝれば
中ふの松ゝけふ所ひて からさ世をつるさ
まゝ星
和泉のかづら 桶の名をとる
紫 垣のふるさ 松ハ 破まさり
妄保意
貫もよむゝり 桂ハ黒石
平蕊の忍びくわゝる 秋の風
黒石の坂ふ多なるべし
蕊ゝる 蕾の 月ぞひゝめく

もつとより西の　此乃松ゆしく
繁さる宵の人く　松しあらびたる中
ゆ西国れるゆど　きよく　さゆ　る人乃もの　がれ
まるに繁さる人の下て乃ゆく　松ゆまる
ちまえ

粥ゆ　玉子ハ　何とらふらむ

山茶花の様ハ　水仙　梅　樓

二句とも　ちまる　て乃ハ　ゆれ　たゞ　てひ　ゆらべ
たる之　附合の中ハ　必かる　句　ゆるべし　上を
ハよく　やり　句を　まる　之　乃べし

雪ふ　鞍　れく　仆　貫が　馬
やぐり　七む　大江の　屋乃　八百　家
雪に　踏　出る　一　貫が　言ハ　大江の　屋ふ　やぐら
隙　ゆ　て　こ　ゆ　附　句　ゆ　る　や　ゆ　る　て　も　れ　さ　や　ゆ　ら　ね
割　乃　ら　ゆ　く　状　ゆ　の　蓋
侍　従　報　も　先　調　ゆ　ゆ　ぬ　室　れ　ゆ　ゆ
おき　ろ　き　つ　け　句　之　度　く　の　状　面　ハ　ゆ　を　ゆ
ゆ　人　と　見　く　こ　ハ　ゆ　従　報　の　お　ゆ　と　ふ　て　め　さ　て　う
の　侍　従　報　を　ま　く　て　て　し　や　う　ま　ら　ば　を　う　か　る
ま　ど　き　ゆ　ち　ゆ　従　報　を　金　ふ　つ　き　ゆ　く　こ　の　ゆ　ぬ　と

いろハ階稽の形延寿草

宣松が 徒年 外も 虚つく

花ぐもる 中も 初を思ふらむ

二句変ていづれも句をなし 他なり 白えハ

ささえるまゝ寿草

森の 栅年 鶯をなづめく

鶯の居る花は 紙屋とよめり

はの句のすつまびらやふ二十三条より瓦べ

口をとゞ

敵 よりを 寿ハむら 松の年

有ゆの 梨 折 えぼし えぼりる

はの句も公羽の名高き 附句 茶句の 柏子ふよく

のめ〳〵えもいハぬめでたし 句の 柏子といふ

をしるべし 句えハ おのゝ面なし

敵するが 祝 ぐりつる 紙ばらけ

えぼる 眉を かく さてきぬゞく

ちゝ ものがゝめる なるべき 併え

体 動の 寿ふ 思ひちふし

待る ひの 陸ハ 階 る いまの 中

体 動 寿ふ 面ハ むさちぎりる るも 待らびく

思ひ子たるに付よ里ちんと結ひひかて
やうく結のなるほふ事めたるといふてろ
の附合なめ一句ハ結を結て居たるが結ら
ひかめく結ハ事の中ふ結ためとつふやく
ふきこゆれどもちるハかくらずたゞ結のなると
とをやちしくいひのべたるこ

京ふ　汲さる　磯井の水

五

川やれのくいの　ふ見く

凡伝のえをんこの水かとの水なとさべて
水をたのむ人こちきバこ川のこいまでめど

かみしなるべし

餅つくる　猫の　廣菜を　お合を
贄ふ　買る　秋乃ころろハ

糸白猫の姿ほ乃餅つくるを　おきゆるとこ
見くいけよえ　買る人の　何れなるまぢ
をつけたり　秋の人ハ　絃の字ちれバ　なる
たころをつくきり

姉　待　牛　の　一生よりの　乳

伯　何いぬ　越の　徧を　織りぬく

姉　の　生きを　待兼る　左ふのやうさてちぢ

採ふるひたぶらおもひねるちよ
俤のこゝまてせをしの並びねて
卯月乃雪を　拯（キヲ）るつくゞね
茶白ハ田植の俤ありなるふ雪を拯るとふ
ゑをいしらひたるこ
四ハ月ぬ　年をうゝふ　傀儡（クワイ）
鮮中ふたゝくる　車のゝ屋（ス）を建て
松本　ろさ俤合こ車の中ふねるこハ拯ひ
のゝるこなるゝ傀儡のゝふ年をさて
もしやわゝ多の上をゝふよハゝらぬとゝ

ろさゝくたゞしこと車のゝ屋を建るちまふ俤
たり拯ひふこの年隠　ほうゝくかこのごゝく
ちらむ
老の身ハ縄なふほどふほろめる
君　流ちを　海の　年　る
茶白老の身ハ流ほろめゆくハ老なゝら縄なふ
ほどふ拯ろへるハひとうこならぞ拯ひふこ
こ見ゝ極老の年るゝ　なゝ世の中こ
だれて見さ流ぬひ　ゝの年るとふ
ゝく縄なふほどふほろめるちてろめを

らしたるこ

木の葉ちる 楓の末も 秋の月

つくづくとうぬる 峰のしらくもの

荻白木ずらし吹立 楓の木の葉だらしくと

ちるものさびしきを 秋ふと見るくひ

きのくずしたる 法人の所作のうつ(をつけ

たること

葉をくむとくく 森ぬりしき

火ふめして 降るものこそ 何光ぞ

荻白川びくのうひさきふる夜ふくるまで

雨もやらぐりくしきのうまこそあるふふ炬火で

ふりくゆるものこそ何光ぞくがめるけ

たれふける河めさなこの山どこえの炬の燈ひ

らひの炬うなる屋し

ちまくの志れうをもめ八重月の新

人一代乃夜ふ秋

さはぐのかをめこいふすめ次ハ夜の白と

ふくく月の秋ふれのくちあげものがる

ーてたびひをさなる花附すめの夜をつく

まざものがるちまこ古物伝すもかるけ

伊豆おもゝろき俳諧あり八重

下こゝをにくめる雪の叡乃亭

早咲の梅成こゝ少ふたと〳〵たゝめ

茶白雪の叡乃亭に結なゝどつくり酒さゝ

ゝるゞ中ふたゝりくゝ戸たるをのこをそゝめ

ゝりゆゝ片ま次の白それをうけくゝるこゝの梅

を赤身ふたと〳〵水のれと水のれ成ねゝる詩人

伊達の情をい〳〵めり

吹安き叡成ますらが　後立こゝ

ゝふよゝを　常ゆゝほゝぐゝさゝやら

あゝこ八をゝりきつけゝゝろゝ之茶白碁の叡乃

吹安き成れめゝるよりほゝぐゝさゝをやゝ

くゝ後立げよゝふ陽稽之ゝゝぬをゝらゝ

ゝぬをかゝつ風流才一のほゝきれ成かゝ一

ゝゆゝる風流公爵ふゝのらぎゝゝゝ後をや

奇よゝをむ叡名月をゝぐよやハ

ゝるゝゝのゝつぎ成　西さて冨士

茶白叡名月をゝぐよやハをゝぐさべゝ伊ゞ

ふゝ奇よゝをゝゝなゝゝゝふゝさゝ後白ハをゝでよゝの

ゝ奇ゝゝる使の蕎麦もちて冨成ゝえれ

さてぐしもとよりかくるかたちなれどそ
はのみつぎばりハゆゑさてあらむとをとこ
いひたるゝ

稲妻の光くゝ来まバ筆投ゝ
明ゝ中のわうくゝ片袖をもぐ

茶白ハ猫屋敷にておうきゐるゑ〳〵稲妻の
光りまゝるゝ筆をも投ゝ
ぐゝ茶ハ白ハ猫中よ猫ぐゝ立とし
わうハ中片袖をぎゝもぐゝ屋ぐゝのせつる
切ゐるかへたるゝ

ゆゝふ屋平かるを借る旅人
今ぐゝゝふのまゝ哥枕懐平
附ぐゝ石ハ旅のまゝ哥師の迫れわゝりのゐ
ゝふ下りゝゆゝるゝ所。まゝ哥ゝゝ書て旅へ
ゆゝるゝかるゝりれたるゝ片ハバゝの日れまゝ哥を
懐中ゝくまゝゝゝよわが命ぐゝたるゝふゝさ
はちまゝ

汐ハ干ゝく砂ふ舟ゝく須戸の浦
日毎ふかたゝる家をゝの ひゝく
須戸といふよりゝ源氏物語須戸の巻ふか

の須磨ハむかしとろ人もすみわびぬ今ハ里はあれいとゝろびとゝろ人なども所をもとめふくめるれちハなくゝも左右のそぐこハかるものゝ

をゝ今ハ家とゝ侍ハ椹の木乃中

屋(ヒジリ)して家(アマビ)ねたゞらに月もをつ

椹の木乃中ふまるゝ食ハひろゝふゝ食ハ陰

固の人ならむとかくつけるゝ西行の撰集

おなどの歌をもるべし次の句禅えのゝ

ふいひうけゝり屋法ゝとゝりゝ義乃

中の月をもゝつと何とゝなく禅えの禅伝まゝ

こゆゝゝにゝのやゝしゝるゝ世の仏諸を法

さゝるものかゝるゝをも何くゝの禅伝何くゝの

禅えなどゝちまゝ仏解まゝる仏諸ゝらぬ

ものゝゝちゝぎゝちりもゝしゝ句ゝもせゝよまゝゝふ

禅えの禅語ゝをバろ仏ハ禅えの禅伝ゝてゝそゝは

礼仏諸ゝハゝらゝじゝあ仏ゝよかゝぎゝらゝぞゝゝゝ

なゝどをふくめゝる句ゝゝゝ底ゝろゝ仏ゝろ

けくゝ侍のゝゝゝるゝてゝろゝをゝゝ仏ゝろちつ

けゝそのゝゝゝのをいひゝゝけゝらむハいゝかゝ

くなるべしかくるるの人赤面時面赤くいつる
のく往論ふるくいひつ
目茶のりたそのまく詰ふ似り
八ッふなるるるとの人顔はげなる
きぐふけつけ白るてもはきに目茶のりきを
たちまち詰ふ似るハオるのりげと見て至戒
なぐのるす故意ふハふくめんどろのるハ赤く
ときくるるやたつりたるものなりたさ
出つけ白目おのりきをろのまく詰ふつる人
を大人すくハをりからだオるのわ見と見

たるるかぬの人心をつくべし
小畑ちびたる窠山子 似らむ
るるの戸れ馬を沽 僕ふれさへられ
をうきけ白るくくろはきに茶白のやく
きれ粗のきぐくと見くかぎりるき豪欲
被遊の人をつけくり日く数升の酒を飲
くるれ價故はのぶたのふるるるるるるるるるハそ
のたのふ馬をれさへくらるるる世を酒壺の
間ふかくるく祝ぎけ人なるるべし
酒をあや高居去の右ふ赤りるむ

以代ふ出く　海苔　さゝふね

茶白世の中乃俗　拍をきけ〳〵こゝろしりるる

ものだりかんれやふ法りの中ふちきを茶屋

世の友といひたるこゝ茶屋世の家とてさひ

ちきふたゝへたるるりかぬくハろのん

をもふくあり　後白ハ水色ふ水色をうけて

たゞこの沈時ふを中ハきるのこゝろさ

人なし

籾　臼の音ゆたぐら赤いびき

月をほしこゝる　螺（ホラガイ）の　酒

茶の白籾臼の音乃大なる音をゆてもなるう

ぢ高舂かきく　既り居る人ハ高砂の後

の碎（スイダ）砂と見く　螺貝よて就りたる大

丈夫をつけるこゝろ　茶白赤いびきとの

きバ自の白ゆて　碎ぐこゝろうつらしと籾臼

の音をきくこゝ

辛螺（ニシ）からの　使　流る　蓮　水

角ゆ〳〵　眉ふ　化　粧　きる　素

清ふ納元の　拉ゝる　奥のふ　きこゝ　ぐ　きも乃

老のけハひといひ　たぐひ　ひゝつけぐこゝろ　ぢ

うならさで

海苔 出雲 川口

搖干ふ 頤 なてらぶ 夕 きぐみ

苔白の 切ふを きぐふつけく 水藻の搖干ふ

頤うちなてらべく 川口の出入船をなぐめる

けしきと

初月ふ 卯月の 妹乃 切西ひ

落ハまねく 荊 袖 ひく

嫁のり西ひきる 左ふの乃く 思ひやる屋

しら落ハまねき荊袖ひく八藤のかくよさ

なるべしをうしき潜鷺のつけ白と

わくり舟 拙も的方ふ 山ゝ入ゝく

陸いくところ 西ゝ 東ゝ

肥苔の山河

涙をうえく 鄙の 袖乃名をつらく

鷺けづる 熊の 袖乃名をつらく

蒙白涙なぐらふ 樓形一首よみる 鄙人の

晴乃せつなるに 後白八哥の上の白北やゝふ

去とて 鷺の 袖乃名を 熊のとつふをつら

しとゝかく 藤形ふよゝたるけまるつける

なり

くさまをれてたちもゐるぬ

又乃軍 成 起ふしの姿

くさまのたちもむなしくるとうふすり又

八軍ふ出たぐられのが身八商ふ又ふも

まくぐふすあらぎくちをしき月日を送

りく起くもふしくも又の軍を姿る

巻子の膳をつけくるこ

三度ほしれまれ勅のち笑

山まが車ふけづる本を着ひ

かれふ酒ひくくよくみことのりのふちかくけ

を三度まぐほるふ八ふのくうたなど

四ひをて山まるふたまりくことつけくり

度やれく月八むりの紅ながら

老りむうむが 花くつ ちる

茶白八未拾花の巻乃れもりげをもふくめる

り後白も共物之

道の色れれふ一喝志めり盃

毛者の 輿 午 水をなげこむ

茶白八たくまき徐僧と見く毛者をもの

の数ともせずに輿ふ習を投こしたる粗暴
はしたなくをつけくり
蒸ふ（ツヾクラ） 短冊つけく 於やり
糸 盃を 省 頁 ちぐ 臣
つゞくらふ短冊つけく 放ち糸ふ盃を頁
ハそ何ぐ 大きなどいふものく 拾びたるべ
しされも伊の對附なり
翌 強なくらふ 宗ふよらバや
打 投るなるく菓の名を立き
附ぐ乃八菊をもらひく 降るなふ翌のね

乃きくゆる宗ふうちよりく 於く みるる 冒に
大るのく菓の名を忘れたるく 前白優艶（ユウエン）
なるなふ次きやちしくつけくり
酒ふ 奥 何る 友をにつめる
ぬけ 和る 又の一歯 乃かなしくく
はつけ白 菊ふれ 和き 換なり 前白八れ
ろく酒のくくらな人なるを川 猪ドて又の
歯のぬけ和るがかなしいとつけるもの
ちれど 理なくらぞ又の孝賀 或八めで
たた打ふふきく又のよハひのかくぶされ

はをかなしめる者子の情をかく蕪句ふつゝハ
れぞ引とゝなるゝくつけるハ名人の手段なり
夫この句ども初論蕪句の拙作時のよろし
たゞふまゝぶんぶし
山ざくらハ盛も狐の化ま殆く
花とひ来やと泊つゝほらし
盛も狐のほらぶるるハよわど山ふるさ
見ゝ花ふ人のとへりとゝく泊つるらむと
ゝふつけ合之若句のこゝろよて山さくハ何ものな
のちひちさちるとゝるゞこれも俳句ふり

猶じゝく大地の山さゝ[illegible]ハるはゝらゝ之
白き岩壁の垣を乗こゝ
猶ゝめを探め根ふ筋遠て
蕪句妻日のはゞゝなるにひらゝゝ故障の
垣を乗こゝ内きを毛屑なゞゝ見ゝくよさ
日和哉見ハ世て猶りゝ れ何らひなゞ
女のまわぶをつけるゝ
問なれ記念の歌ゝるも出ぞ
何ゝ焚火ふ皆つゝ乃里
蕪句ハ天敵ゝいつる俗もの俳ゝ俳句ハ人

の方へ脇へ寄せる為の所作なるべしとまうけさ

はなかり

蕗（シブ）　指　和し　主人の義信

木芽（ツキ）　兎の　わかが　葩や　はぬらむ

たゞその坂下は附合之本兎の芽を葩ふ

一名をあれ蕗　階督

方々の侍衆中ふにくまれて

燒こがし　たる　小鍋もろけさ

ぬ人めるの情をつくり平生に勢をあく

おいひちで　なるどしく侍衆にうくまれ

のたまくふ鍋燒こがしたる在さみとのさ

ふいひたるゝるぶ

船　遣のけく　蛸の　喰能

青やゝ八ならぶ　みる　和乃　ふ

ゝもるゝ　ゝ　ゝまり　なる　芽　枝の　ゆめ

世に八ゆるすの之

お　おゝ　さ　白田も　花の　本　住　て

つらも　ま　ま　ふ　露の　卵　わる

春ゝ　日の　茶　とゝバ　才　二　茶　る　蕨べ

枝　芽　たゝ　ゝ　れ　ゝ　も　指　の　上

ともしびの氣めづらしかりきの文箱
もはのとふ顔見たるみをく雨もきぬぎ
さをさの文箱と思ひよりとる
いうやうの恋もたつべき落雷
琵琶を加へ文箱 出る歌
古ものがたりもはるべきれもりげを思ひ
せく琵琶を加へ文箱より出る
ハ何ぐの更乃いろこのなるべし
俗 ふる下る心れ松 砂の坂
宗長の夏寸 白も筆の跡

附えきこえるやうよて一陸行ぐやうあらず
粉 陸き袴ふ秋をうち 松を
鬢のの鬢を見付たり
前白袴の粉乃陸さをうらあるとつふを秋
の字ふ心をこめく衣の身ふろぐハぎむつ
しく杉ゆるハ人の老るなりといふとりて
むどめく鬢のの鬢を見付て老を嘆く
よをつけくり
わが顔ふ花ねりたる梨の花
陸ふ 松 陸 とつ みし さくづき

梨の花のもとふ陋きりたる人あらば此樣と
いへる盃ならむつけ句のひぐきぬとつふ屋しと
てハ俗の化名あれバいうまもなづくべき故
故樣といふよてあ新ふ花のちりかるりた
るぶめ一美ふふらしく味ふべた附句と
蕪村 あるきるハ ちるハとやらば
栗 稗を日毎の 森ふ 鳴 鹿く
森よといふ一字ふて僧とする世ちりもとよりも
も搗身の行あるれバいうあるぶいうあるふよを
いるべりれどさたぐる肉 あれバかるかるる

里ふハそろとまらば毎日の栗稗ふハうむ
昴ちるちまいとをう
叶 秋も門の板搗 蕨りり
赦免ふ赦ふ ひとりいる月
茶白法ふ家の柱も岩き樹木も枯
門の板搗も岩るといふのさまき不を延不
と見て赦免ふ一人とりのとちき流
人をつけるる 儀寛 併もるべ
もとの廓ハ 畑 焼 る
重 沉乃春も一ふふのらたまり

苔白むこの八橋女町まち
ふもとハ雪のこゝ消りゝ後ハ梅畑ふ形り
お撥り重つるけまを見く重紅もはら
たまりとつけるこ廊に重紅とつふひ
びさきり
古の雪ふ先人はるれとや釜掛て
麻暑をすぐらふ化粧つくし
黄白ハかこひをぐふはつ海りて落葉をと
たてたる雪の紅なるが内て言し先志ら
はるこらむとゝ答はげてすりかゝりくる風流

の席を後白仏の川粧じゝ左ふをなぐの
拍女乃紅屋とし知るつけ合こ
鐘牛の赤花を踏つぶてちる
身ハ蝶れはなるこゝ答や笑つらむ
さらしらはまゝ附会なれど一句をゝし
いひのべたり蝶牛の赤を踏つぶすふふ様も
ともふ踏またしるこ様のはなくいひけり
はなつ教月を行抜れそる見て
出湯泉 鼻へる 陸奥の秋風
ふもを重ふるのをつけるまゝ附句

ちり
ゐるときハ鉾もなの入ぬらむ
樟の小枝ふ 立をへだゝ
黄白ハうき立ふ思ひ一づみ〳〵蜂うもなの
入ほだゝりちるこ後白ハ蜂といふ樟をつ
けく立をゐつゝひたるこ
霜降山や 石髪たもうげ
ゐもゆハ軍をいたるゐ来て
山ふ立おのゝ〳〵ふるゐゆゆはまふ髪の面影の
ちゝ〳〵ちりゝ立ゐ一げなるゐ白ふ

をろのまゝつけ〳〵軍の出立を冥まで送
りゝ〳〵けるふの白ゐめをるゐ〳〵ちこ
紫引雪車ひゝ筋の 行有て
れの〳〵 武士れ冬ごゐる宿
黄白ハふ越の大雪なるべし後白ハふ国の
塚を踏むと大軍たゝひ来ふゝもかの大ち
ふ馬の蹄新古べゝもゐらぎむなゝく武士
れ冬ごゐねて立をまつちぎゝるや
宮ふ百ふ一〳〵ゝき名 孤り
ふ松千面ち 松を内一入ゝ

前句おもかけちかくうるの池添ふをゆるちかし
まのあらをし世なり 後句はそのまゝそのゝ
ゝくわりなきさ蛩のほゝ白ゝ
住かへる宿の柱乃月を見よ
二番 面うらむ いくとも解しがゝし
いくとも解しがゝし
左山つゞきの森ふしゝゝ
淋しさや海なるも寂まゝ 寂まゝ
附句もつけ立もさゝゝスるまゝ之色枯て
なりてハ海ふ入る人もなく左山つゞきのゝ

咲なるべし
花さをたるふ捨りをみちびきて
俤の迷ひ乃 内むる 表風
前句ハ馬ふ乗ゝ捨りゝ人を送るちまゝ
後句俤の迷ひのちむるゝたゞ砕のちむる乗
水と捨りをみちびくゝゝふふ迷ひのさむる
とひゞをたるゝさゝろをつくべし
馬市ゝゝく 狗むりへをむ
懸ける父が弓 簾をとゆつゝへ
附ごゝろ馬市ふ出るほどのものゝ弓簾をつ

だきいりなりしご弱むりへよいつもくと年
久しく出る男ホて父の代より住りゆくと
ら山茶をもねつくへたる古き家あらむか
雪降ぬ松ハ松のかとふとゆかしき
萩 路 去ける 狩 乃 妻
茶白ひのりのまくと悔白を除き山と見てい
のしくと思ひよりたりゆ秋ふむとつふすり
妻と立て去ひ為をきるえれろろしきけぐ
ものをかくやけしくつくりたるハ名人の段
なり

藏 淡ハむと高ろうぐなり
菊花の今ハ衣を見をぬへ
いうなる俳ぐろろよや
杜丹の 芭蕉 風ひのりなり
老僧のいでふ孟ちぐめむと
お白園の杜丹乃夕海をふくめるふら
ろよき風ひろよくと吹けしさいるを奈
の庭と見るく杜丹見の俳もりをつけると
秋更るく花子ふかけむ菊の笠
うくひきまをるゆ波の谷組

桂子の伊ごろもなるべく收れ雨うとひす
はきるゐのりんなるけまをのべるつけごろ
ならむか

供懸のさろふ　見ゆる　箙（ヤナグイ）　火
章　敷　供懸の　著（キセ）　も　蹴（ケアゲ）　まく
古懸のすろふ見ゆる箙ハ供懸の著をとるか
らむとの附えふや
牛のゑふ古いろなぐさむ夕ぐれ
夏雲　立　し　ふとところの　喰
きゝえがゝしまひゝくさゝむとさらバれろらく

ハひゞきゝせむ
松むさびれゝく　宮の　境目
永乐の古きる　領（ジ）をいたゞきて
永乐の代よりれ朱雀（テウダイ）たまりめゝく寺領
載のるなるべし　附えハきゝえるまゝ
なり
捲上るれ　屋（スダレ）ふ　見の　遠入ゝく
おづらふ人平　告る　秋風
二句の上合渡ぬべしハ子を捲上れ
見乃遠入ゝらちのハその母なゞのやゝふし

たるに秋風をいとひたるけしき
但(ただ)繁(しげ)いとなむ　山信乃塔
猿(エタ)多村い浮世の外れ春篠て
除さてろなしたゞそのをれ春をと
星ふる繁い家の柳の かるとと
嘉平　姫女の名をとゞむ月
其の白い星ふいわりき人ふかぎらず繁ない
繁のかゝ除まゞく ふるとと 恨白ハ七夕みふれ
ゆく舟よゝ或ハ古人の舟をもて ゆのとゞぶも
の高ハ嘉ふ出る姫女の舟ハ芙蓉し

かついやしき姫女なれども舟をよめバ嘉ふのも
入わゝく名をとゞむるとゝらやゝたるさま
なるべし
笑嘉ふ出ゝく家 孫 たる
孫ふゝ咲赤信を 屋のかげろひる
けのゝ時ゝなり
雪みろ孔泊をの市れ名ゆて
傳いきのねを 蓮 庵 の名
傳ゝきの只四ふ居てもけるゞとる庵ふ
高わゝく高ゝなりしハ伝階の連庵なゞ

いふものなるべし 俳ごころハ此ら之
やまめ 鳥乃 巣ふ 映 隆
平つゝ 翠も越 ぬき 花の峰
俳意ハ名詩の心ふをもれて 雲ハみいづくの
つゝどとの山峯をこえむと思ひやるふと
うなるさてろしゝくやまめ鳥のゆをきゝて
もりぐまをとをかき妻よとるれて寺をき
ゝよ杉もむゝよりゝろがろき詩のゆふ
ぐれなのらむ ちれど花のひなれがなぐら
むゝも杉のゝものつゝ

梅くふ 梅の 花乃 指つゝく
陸奥 ゝ つ 春 ゝ ひらひ 顔
これも俳の篇の俳合之並句ハかぎりなき
梅ごゝろ 指つゝ だりなるをひらひ顔と
ハ俳ゝつけむ 走りもよくつきたる句よて
梅くゝの梅をいひつゝ 位ハたゞひとり
何ひゝくひらひ ひごゝる 春ゝ之をゝ女の
乃ゝ 梅わきてゝ ふゝゝゝゝをつくべし
鶯の 羽をし む 囀 の 氣
春 ゝ ハ 梅 ゝ る 児 が 俳 ゝ

茶白やたしく面りんなるふと見くく児の髪
スくる者とつけたり 鎌倉の乳ふ児をさえ
く 利かいくぐうさ見ばいるなりんまらん
らむ打うらまをあ内へ俳くくえあやうなるふ
児のくうハ後うあ志づくく泣ざらむかねて
ハ鎌倉の乳ふ鎌のねをくむを児の髪う
はふたくへたるえ
御道ハそのあ紀までわせびめ
武 懐 のちと産
打うさ打くふ ふ
面ゆのまくあるる附合あらむ

ちまくくの行ふいのるかねて
出 借しくく弟あきあも恋ぶらむ
茶白ハきくくえくふまくあくつけぐくろハ怪ミツ
などの伴あらむう君の恋びゆきあふふに
きくぐひて君の恋乃くくやあくさふ弟なき
系くまでまえづくくあのびくくそさふら
へなどたハあれいひたるさまくくゆ
行づとめ妻帯 さの 後 乃 奉
くふも 命と 故 乃 と 会
茶白ハ門 後 さるなどの行づとめふくちるにき

陸の古年乃そこゆふ毒を飲じて暗の
を合のりくふもほとをとほ所のびるらむ
とのりかくたるをつけるこなゝ妻帯
を峰と見くる附会
かぼろの 鳩乃 羅 不の月
ものいへば京(コダ)寒ふひぐく 春乃風
ちきるえんのこゝろ
糟(クス)を かきむる 塚の ほらせ
初雪はよりなき出を 化(ケ)粧らむ
俗ぞろ人を 埋める 塚の ほゝめけえふ

初雪の かくを見くよりなき出ふ雪の
かきくくつくしげふけりてもすハいらぬる
なるふゆりくふかなし 内のまちるなふをへ
へふゝや
おとしめむ 屠を 信ふ生 雪て
月内へ 凄(スゴ)き 陣中 の 市
おなおとハしめて 料理 雪 屠を 信ふ
いけ雪くく 恰白むぞ内なるやくを
屠の 西ふ面らぞく 陣中の 麦 物とんさ
ふたくくらたく

小袖 袴を 着る 戒の師

わがぼむの母ふ似るもゆしくて

赤子の乳戒に小袖 袴まで戒師より起く

是高くるえかくるおなどよつぐくてえ尼ば

わがぼむの都の母ふ似るぐゆしてえ人結

をつくきる附合なり

奈良の京結つくへかるる古今集

花に 射きぬ 坊の 酒義

前白いるもちふにに古き古て集も

何るなし 附ぐくろはその古て集もち

たるはちふにの坊と見く花の沢ふ坊の酒義

をひらくくく

春だね 新きくく 幕ふ元

孫木をつくりて古れ衣を見む

春用きる不をみちのくとあひをていふ

しのめく孫木つくりて古き世の衣乃

ちまを見るれとい附合なり

眠くはる の 袴りふ 立ぬぎく

百里の 旅を 本曾 の 牛迫

目前の 旅 紙

豆くゝぬ 枳ハ 何と有く思
古ハ所を寺ふたゝる 桂皮葛(ヒツガヅキ)
古ハ不成するに成したらむハさハめくきの
そゞく思もあゝらむ芋の白ハ京の秋の
外ハ思ハ何とふて なゝらむくの清稽之
月見よと引起さゝ孤しさ
髮 ゆのふゞ古くる 蘿(ウスモ)の 古歌
茶句 青よりふ たる人をさゞりいぞ
なゝきものゝハよゞ 起くゝ月をも見ぬへ
くとは古くり 杉とゝ ゝ孤りそとと

接句そゞく 京ハ人を見くめでたきはま
をつけるこ
的ハ 的の 末年 咲る 山吹
春を 孤し 七ゝの 寺乃ちゝら石
七ゝの寺乃ちゝらためふ引よくる石のを
と京ふ移りても立ハ思ひ出さは なるべ
しちゝら石的ハ的の ゝりふ何るべきはま
なりそべく かくるるハ武家ハよくある
るく的ハとゝいふよくつけゝり
かさ消る 蓋ハ聖中の地花よて

つりたるる山犬の声

萩白ハ壁中の地蔵の菊ふまるるとふ

階鶯なり後白ハ壁宿なるべしかるる人と

見るくの附合之

昍子松ゞ石しく片萩の宮

盗人ふつふるるふ妹が笄を注て

萩白ハよのつねぬれ田舎のけまなるをり

枯ゞく盗人の宿の昍子ふ去らへたるつけ

白なりきろ石なるらば盗人の妻となりて

身をくやるるろ石のふるむべし

萩の墨 俗の宿 徊ハ注

ものいへばふ笠ふ顔をかしいる

前白宿徊に萩の墨注かきたる風流の

きゞたるよきるる人乃面新なるべた

しふ注ときけ〜がきや〜さを後白ふ

てハきでたものいひうけるバまるふきる人

りるるえびしふ笠ふ顔かーいれて去らぬ

かふふもてなしたハむるけまと

盗人とハた 二十ロリ ハの里

松の松ふ笄をならべるまるらむ

前句何となくふるどとろくの里といふ名の
所やしたる盗人のをるべきなどとゐ侍句ハ
きたなかちうの杉ろろしたるふよ六十六部など
いふまの〻雖宿してとふ大とーの杉といい
ふよて一一ふくこいきやゝさて見えたり
所の月も哀ゆとろ思ふとろ思ふ
雲ともさゝえぬ 猶のいときに
哀のまことをつくさる附合之哀所ハバ
こゝろ月を見こゝもかなしふふ月不
雲とつけて雲ともさえぬといへるいとかな

衣を さて〻 涯さく 世の中
酒のめバ谷の 杉本も 佛なり
句の杉ハこゝをもうちまて〻まのゆまかま
ハぬをこゝを敬愛の匹位と見く酒に酔
たる目よハ谷の杉本も佛のやうにみゆると
いへる附合なれど衣をきて〻
世の中を涯くさまむといふハもと反心なる
をこゝ杉表ハつりねどたるとして杉重
佛なりとつけるぬくのを暇れろるべし
洞の 杉 義ふ 心 ふる 反

芭蕉の葉ハ稿の泪や深つらむ

山陰菊 琴

冬を隣りく 伝人 笑州

くふも又殺日をおむ 石のうへ

まことふ此つけ白涙を為まべしとうむと

きれバかへつく意成損ぞふりく 黙儀

芭蕉公羽附合集評注上巻終